

筑前宗像の一家事記録

古野, 清人
東京都立大学

<https://doi.org/10.15017/7177185>

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 8/9, pp.281-314, 1961-03-15. KYUSHU BUNKWASHI KENKYUSHO,
KYUSHU UNIVERSITY

バージョン :

権利関係 :



筑前宗像の一家事記録

ここに掲げるのは筑前国宗像郡須恵村の古野氏の録した一種の家事記である。「永代家事記」と題する一冊は享保十七子年に始って天保四巳年に終っている。表の紙の左右に為光と則光と記してある。主として兩名の執筆になるものであろう。伊作（為光）は幼名を吉作といい天明四年に生れ文化十三年十二月七日三三歳で没している。太三（則光または則充）は寛政四年生、嘉永三年五月二十五日に六〇才で卒している。伊作（一七八四—一八一六）以前の享保十七年（一七三二）以降の執筆者は不明である。またこの「永代家事記」は冒頭に「此前ハ書送候」とあるから、享保十七年以前の記録があったと思われるが存していない。

「永代家事記」についてはおそらく神官であった尾形繁義の「古野氏家事録」と題する写本がある。その文体は形式主義的にやゝ洗練されているし、また記事が簡略になっている箇所もある。むしろ原本の方の表現が拙であるにしてもニュアンスに富んだ地方色を感じさせる。この「永代家事記」について、「天保五年ヨリシルス年々家事記録 二」の一冊がある。これは天保五年から嘉永七年に亘っている。これも太三以外の執筆者があった筈である。両冊によって享保十七年から嘉永七年まで、

古 野 清 人

西紀一七三二—一八五四年間の百二十余年の須恵村庄屋の家事記は終っている。二つの記録の執筆者を伊三、太三以外についても推考しうるが、格別に重要でないと思うから略しておく。古野家はもと鞍手郡若宮郷倉久村の古殿に居住していたのが、元和三年（一六一七）に当地に移住したと伝えられている。

宗像郡は寛政十年（一七九八）には六十ヶ村合高は五六二四・五四二・四石。この高は地価とでもいうべきもので収穫高と必ずしも一致しない。この高一石に対して何斗何升かの歩合で貢租額を割当てたものである。当時の黒田藩領で五万石以上は遠賀、鞍手、宗像の三郡だけで、宗像の五万六千二百石余は二位であった。天保郷帳によれば、五八二六四・七〇四二四石で、およそ半世紀間に二〇四〇・一六二石の増加を示している。

宗像六十ヶ村とは畦町、鳥巢、本木、舍利倉、内殿、上西郷、下西郷、津屋崎、渡、須多田、大石、在自、宮司、手光、津丸、久末、大穂町、大穂、王丸、田熊、久原、東郷、八並、村山田、用山、怒山、勝浦、牟田尻、大井、田島、神湊、大島、野坂、朝町、曲り、光岡、河東、多礼

吉田、田野、池田、上八、鐘崎、江口、地島、徳重、藤原、名残、吉留武丸、石丸、赤間、陵厳寺、三郎丸、平等寺、土穴、山田、田久、須恵、稲元、から成る。このうち二千石以上の石高の村々は両西郷、田熊、野坂、武丸であった。また千石以上二千石未満の村は二〇であった。本文中によく出てくる土穴は約八二四石、稲元は約一〇七八石、須恵は約四七五石であった。この須恵より石高の少い村は一四しかなかった。当時の須恵は上、中、下の集落に分れていて、戸数は三十を出なかったと推定できる。したがってこの記録は宗像でも一小村の庄屋の筆になるものである。

この家事記の内容は、尾形繁義が序文に記しているように「公政郡令草察及年載豊凶年代異変五穀直価」の多くの事象に触れている。それは単に一家一村の年中の記録に限られていない。またこゝには反復さるる年中行事は記されていない。年々に発生する新らしい事象を、僻村にあって興味深く見聞して筆録している。叙述されている多面な内容を検討してみると、執筆者が生活上どのような価値体系を抱いていたかが窺われる。農村に生きる人間の目が鋭く作物の豊凶や自然の運行に向けられているのは当然である。米、麦、大豆などの直段の高低が克念に記されている。旱魃、洪水、風害、虫痛などの年々の季節による農業の危機を通して、諸穀の作並が克念に記録されている。旱魃はたとえば宝暦元年（一七五一）から明和五年（一七六八）の間に五回記録されている。大洪水、洪水も頻繁であった。釣川は川口まで三里に達しないが、その地形と当時の貧弱な土木工事の技術をもってしては汎濫をくい止め難かったであろう。

凶作や飢饉の最大の原因は大旱、暴風雨、虫害によるものであった。

このうち稲の虫害駆除の方法として鯨油の使用は当時において農業技術の革新とみなされたであろう。この年事記ではすでに明和六年（一七六七）に、虫痛に鯨油をさすことが記されている。文政九年（一八二六）の大蔵永常著「除蝗録」は浮塵子に鯨油を使用することを提唱した点で著明であるが、それ以前に幕府は天明七年（一七八七）と寛政八年（一七九六）に稲虫の駆除に鯨油が有効であることを布令している。九州では鯨油さしは幕府の布令より少なくとも二十年前から行われていたことをこの記事は証明している。ついで寛政四年、文化十二、十三、十五年に実施している。それ以後の記事は見当たらないが、明治、大正時代から昭和初期においても現行されていた事実は、この鯨油使用が連続してきたであろうと推察させるに十分である。もちろん、これと並行して呪術的な虫追い行事は依然として慣行されていた。この虫除け行事を述べている箇所があるが、しかしこのような呪いが利くのはもはや虫が退く時期になっていたか不詳であるといっている。執筆者たちは多くの場合、いわゆる迷信や異常現象に対してはかなり懐疑的な態度である。

洪水に関連しての呪術宗教的な行事は認められていないが、旱魃に際しての雨乞い儀礼はたびたび記されている。明和五年氏神に泉水を掘っての雨乞い、文政四年には雨乞いのための城山登り、嘉永五年には鐘崎の鐘引きと粕屋の千鳥池はしへの参加、翌六年の「大旱魃所々雨乞、御上方も五社御祈禱、触村ニ而も社人山伏盲僧湯立火立登竜様々御祈禱有之、仲津宮沖津宮江も御奉行る御祈願に而御役所方も御渡海に相成」、さらに遠賀郡での法印の祈願、粕屋郡の千鳥池での山伏の溺死などが記されている。風害については呪術的行事は記されていない。年中行事の中では八朔の風止めの祭があった。

藩主及びそのビューロクラシーに隷属していた庄屋が、支配者たちの命令に屈従し奉仕していたことは、年事記の中でこれらに関連した記事が多くを占めていることから明白である。藩公、上司からの称誉については明記している。藩公に關しての記事には行を変えまたは行間を一字空白にしている。階級的序列のきびしさを如実に示している。殊に田畠の上納、免などについては当然ながら百姓を代表して重大な関心を抱いていた。黒田家は百姓に極端な苛斂誅求は加えなかったにしても、百姓の生活は悲惨であったことが所々の記事で窺われる。とくに幕府政治の末期においては飢饉の続出などによって百姓は餓死に近かった。また百姓に課せられた労役も重い負担であった。

米麦大豆の收穫は年々不平均でありまた不安定であった。百二十余年を通して、不作の年は多く作並宜しという年は少く、まして豊年豊作は稀であった。最初の享保十七壬子は大変年、餓死多しとあるように大飢饉であった。それで三十三年目の宝暦十四年(明和元年)には藩主は禪、天台、浄土、真宗の四宗に施餓鬼供養を命じている。当郡では大穂の宗生寺、勝浦の大乗院、名残の浄蓮寺において執行された。また安永十年は五十年忌に当り「御国中」法事供養を五十一ヶ寺に被仰付たが、当郡では大穂村の宗生寺、陵嚴寺村の正法寺、赤間宿の浄万寺で執行されている。但しこれらはこの年事記には記されていない。天明五年の旱魃には「両粕屋大庄屋中は箱崎神龍二夜三日、宗像田島之役人中二夜三日籠り、翁面御祈禱、織幡許斐社中は二夜三日、其後田嶋社中織職宮之一七日參籠、神面御祈禱有之。三郡にて千鳥池堀流、夫数三千人」との記録が残っているが、当村では格別の行事はなかったであろう。一郡の中にあっても、旱魃や洪水の被害は部落によってかなり差異があったこと

は冗言するまでもない。

飢饉に脅え難渋している記事は多く見出されるが天保年間のそれは特に著しい。その悲惨な状態についてはわたしも幼い時よく故老から聞かされた。しかも藩の天保十三年(一八四二)寅十一月御達書は「累年世間一統花美ニ相成夫よりしてハ郡町浦之者共もおのつから驕奢之風ニ押移分限を取失い候、弥増及困窮、質素儉約之是迄追々相達事に候得共惡染之風儀、不相改候段無是非次第二候」、しかし反省して「郡町浦も人氣入替質素第一にいたし百姓ハ上下となく農事に委敷時を不失、無他事相稼げ」と命じている。さらに安政元年(一八五四)の達書は「農業一筋ニ心を寄田畠等曾而作り荒申間敷候」に始つて極めて詳細に具體的に質素儉約のための多くの禁令を制定している。出費多い会食を許さず、賭勝負、鶏蹴会の停止などを申付けている。「虫祭り風留惡病除牛馬祈禱之節大勢打寄り飲食等費ケ間敷儀致間敷候事」ともある。また「宿駅の外刻たばこ売買停止申付候事」などもある。さらに相ついで安政三年八月に達書が出て指令を強化する旨を令している。この封建制の下には、百姓のいわば生活水準を高める積極的な政策の片鱗も見出せない。低度の生活に安住立命させようとの「御達」の連統である。

すでに金融経済の支配下にあった農村では、穀物の收穫の多寡と直段の変動については甚だ敏感であった。この記録には米麦大豆の年毎の直段が録されている。年々の変動が農民生活に影響を及ぼしている。

鎖国の時代にあつて、明和元年の朝鮮人來朝、寛政四年の南京船の地島への漂着、文化五年の大島への朝鮮舟漂着、文化八年の朝鮮使節の對馬來朝、天保十五年(弘化元年)長崎に阿蘭陀船の渡來、同じく翌弘化二年の異船の來津、同じく嘉永六年の異船の長崎來着などは、黒田藩下の

百姓漁民として人馬などを提供して苦役に従事しなければならなかった郡民としての関心を示すものであろう。

また天明六年には伊作夫婦が八十四日を要して参宮巡礼、享和三年には伊蔵妻が同じく八十二日かかって西国巡礼と伊勢神宮、文化六年には二月晦日から伊蔵が妻、妹及び下人を連れて参宮し五月廿二日に帰宿している。そして天明六年及び文化六年には高野山恵光院に詣でて月牌料並びに位牌を上置したことが他の記録からして推定できる。当時の神仏信仰の一端を示すものである。

この種の年事記は宗像の他村にも存在していたであろうが、探求した限りでは現存していない。また伊東尾四郎氏の大著「宗像郡誌」にも僅かに簡単な「元文寛政聞記録」、「池田村記録」が再録されているにすぎない。

(表紙)

永代家事記

此前ハ書送上候

一 享保十七子年(一七三二) 大変年也 飢死多し

御奉行

味岡団右エ門様
嶋村九太夫様

御郡代御免奉行共に兼帯

御仕組ニ而河村武左衛門様尾崎与兵衛様と御兩人ニ而遠賀宗像両郡お

受持

一 田方御免四升五合ニ極リ糶お年貢ニ而上納相被成候右之外諸上納御免

一 畠方定免式斗壹升五合去子亥年ノ御定免式斗六升之内四升五合御下ケ被下候

御免奉行武左衛門様御病氣ニ付御助役神崎勘兵衛様御見分

一 享保十八丑年(一七三三)

御免返上秋石別三斗六升此内三升赦免共ニ六升下ル 取立代官吉成源藏様

春作反別三升壹合代ニ去々亥年御極メ

一 享保十九寅年(一七三四)

○御免田方春免石別三斗七升宛 畠春免也

○取立代官替り跡役 高武八郎次殿

○御赦免三斗お引上ニ相成三斗九升也

御免之内式升御下ケ被下三斗七斗御免極ル

○畠石別之内定式升御下ケ被下壹斗斗五合御定免ニ被仰付候

○当年御郡代御免奉行相分り御郡代ハ中嶋七兵衛様御免奉行ハ河村武右衛門様

一 享保廿卯ノ年(一七三五)

○田畠春御免

○御免奉行御替り笹川半助様ニ成ル

一 享保廿一辰年(一七三六)

○六月二年号改元元文ト成ル

○田畠春御免

○御郡奉行味岡団右エ門様嶋村九太夫様藪角兵衛様岡本四郎三郎様

○御免奉行御替伊丹伊兵衛様ニ成ル

○牛馬代として当村へ米貳拾俵被仰付

一 元文二巳年（一七三七）

○来迎寺双誉和尚転衣ニ上京

○田畠春免

一 同 三年（一七三八）損毛

○田方石別御免三斗三升五合ニお極被仰付

此外三升五合洪水荒地御引被下

○御郡奉行嶋村九太夫様替り被成衆生十右エ門様ニ成ル

一 同 四未ノ年（一七三九）

○田畠春御免也

一 同 五申ノ年（一七四〇）

○田畠春免也 御郡奉行田代半七様ニ成ル

○此年稲元村長町六町上八村源助請持ニ成ル

○此年伊作後助左衛門庄屋役隠居願相濟、七月十七日悴伊蔵伊作と改名
跡役被仰付

○二月十一日正兵衛家作大工池田善四郎

一 元文六酉年（一七四一）

○夏ノ年号改元寛保と成ル

○田畠春御免

一 寛保二戌年（一七四二）

○田畠春御免

一 同 三亥年（一七四三）

○田方永荒当荒御引被下現田貳拾三町反別六升御下ケ被下

反別六升代ニ御極当年相改反別上納ニ成ル

一 延享元子年（一七四四）

○香椎宮奉幣使飛鳥井中将様十月御下向。田畠春免

○氏神拝殿建立大工土穴村曾吉山田村助右エ門

一 同 二丑年（一七四五）

○十二月伊丹伊兵衛様御掛り替り跡御郡代大森善左衛門様成ル 又今年
ノ石別に成ル

○此方居家普請大工土穴曾吉山田助右エ門

一 同 三寅ノ年（一七四六）

○田方石別貳升五合御下ケ被下

一 同 四卯年（一七四七）

○長緋手川尻御堀替御郡代大森善左衛門様

一 寛延元辰年（一七四八）

一 同 二巳年（一七四九）

○田方石別五合御免上ル

○石別三斗三升九合ニ成ル

一 同年午年（一七五〇）

一 宝暦元未年（一七五一）

一 同 二申年（一七五二）

一 同 三酉年（一七五三）

○御郡代御替り母里五左衛門様ニ成ル

○氏神木ノ鳥居石垣建立

一 同 四戌年（一七五四）

○六月十三日ノ八月廿六日迄四十二日旱魃ニ而田畠大痛尤春免

一 同 五亥年（一七五五）

○田方石別御免壹合上ル三斗四升と成ル

○麦大虫入

○新曆出ル彼かん春七日進ミ八月三日進ミ天おん母倉^{ツマ}德三日之吉日相増ス

一 同 六子年（一七五六）

○御代官山本八郎左エ門様ニ成ル

○十月七日助左エ門死去

一 同 七丑年（一七五七）

○御代官御廻り被成又御郡代御取立受持と成ル

○三月四月殊外大雨ふり麦取上不仕廻

麦作中四月廿八日五月廿二日迄旱魃、同日少々之小雨ニて村々根付難成、天水ハ蒔物仕村多し

○御仕組ニて御切手銀と云銀札出ル、尤無通用ニ而殊外次第直段下ル

○麦作田四畝拾三步六升代ニ御免極ル

一 同 八寅ノ年（一七五八）

○田畠作並宜大風なし

○おきの地藏堂建立

一 同 九卯年（一七五九）

○吉作西国巡礼ニ二月五日方出立四月十三日帰国

○稲元村庄屋野添伊藤卯三次ニ被仰付

○閏七月朔大雷村中ニ五ヶ所落ル

作普宜

○御山奉行近藤八太夫様ニ成ル御山目付平井清次郎様ニ成ル

一 同 十辰年（一七六〇）

○三月八日伊作死去

○四月二日於赤間御郡屋ニ悴役被仰付 伊作と改名

○田方虫痛強し

○御地頭黒田惣右衛門様江戸方御下向青柳ニ而伊作へ上下御拝領被仰付

○八月廿四日妹おさん逆死

一 同 十一巳年（一七六一）

○当家酒造初テ致ス とうし半吉

巡見御上使三月廿九日赤間御泊座

黄印本使

青山七右衛門様 御茶屋お泊り

青印お目付

神保帶刀様 町茶屋御宿

赤印副使

花房庄右衛門様 丸屋お宿

御案内庄屋下西郷奴山在自田野野坂名残。平井清次郎様御算奉行ニお

役替お跡久野善助様ニ成ル後十兵衛様と御改名表粕屋久原村御在宅

一 同 十二年（一七六二）

○吉田久兵衛様御当職御再勤被仰付

御嫡子式部様式千五百石お加増

○宗像郡中ニ而拾ヶ村払切指紙受返候

町人欠落仕間違ニ相成御郡代御逼塞

徳重村大庄屋武六借銀ニ而先納指紙間違ニ相成閏四月に日数九日橋口

入籠、夫方家居財田畠御上へ被召上、其身ハ御郡追放被仰付、残ル大

庄屋三人共ニ逼塞被仰付、余分ニ過銀被仰付村々払切間違銀ハ庄屋弁

ニ被仰付、大庄屋跡役野阪村庄屋徳七大庄屋ニ被仰付、触割替ニ成須

恵稲元土穴ハ田熊触ニ加ル

○観音堂建立

○閏四月廿八日大洪水村々破損多し、夫々旱魃村々余分根付相成不申、麦尻処ハ漸半分程植付候、当村ハ皆作尤三畝程水ニ根付不濟、五月廿九日少々雨有、当村ハ少井手水増ス、六月五日六日潤雨有リ右三畝も根付仕ル、三步作共ハ有之

○大豆作六月朔日二日ニ蒔、土用は五月廿八日ニ入ル

○七月十五日大洪水此方前之池方上ニ式尺程水湛る、長縄手川土手破損

○八月八日大風万作大痛別而蕎麦作皆損

○田方御免返上、九月八日御郡奉行嶋井市太夫様御見分、同十三日大庄屋見分、同十四日御郡代様御見分相濟、九拾五俵壹斗九升御下ケ被下、石別式斗六升壹合ニ成ル

○十月御郡代御仕組ニ而御止メ被遊、御郡奉行宮川治郎左衛門様宗像兩粕屋共ニ三郡御受持ニ成ル

○御山方御目付共ニ右三郡同様御請持ニ成ル

○若殿様七月十四日御逝去被遊候 御名松平修理大夫様御才廿六 御戒名 瑛光院殿前四品道作大尹瑞嶽紹鳳大居士

○黒田美作様御死去御舍弟甚太夫様御家督被仰付

○田方払切十二月切相濟

○畠方払切翌正月切相濟

一 同 十三末年（一七六三）

○御仕組ニ而大庄屋百姓共ニ福岡年礼相止、郡中惣代年番大庄屋壹人ハ罷出ル

○三月大庄屋触夫御引上ニ相成村限ニ而触状廻ル、大庄屋ハ身分壹人役目除ク拾四人面役引御引上ニ成ル

○庄屋ハ只今迄面役十人引ニ候処是又其身面役引庄屋給米貳百石以下村ハ拾七俵、右已上五百石迄ハ貳拾壹俵、夫方段々五百石境ニ而段々四俵ましに被仰付候

○八月廿六日 若殿様御次男 平八様御逝去被遊

○九月六日福岡御城内出火御下屋敷不残焼失、裏御門風吹越追廻し迄焼申也

○御館御普請ニ付寸志米指上候者米壹俵已上八十月二日御下敷御門内ニ而 少將様方 お目渡被仰付、御当職吉田久兵衛様方御挨拶当村三俵伊作壹俵七次壹俵正次方壹俵儀三郎四人罷出其後御書付御渡被遊候

○十二月 若殿様御養子 集之助様ニ被為濟廿四日ニ於御殿中 御老中様方 小將様江御道具壹本御挾箱対ニ被仰付

一 明和元年（一七六四）

○朝鮮人来朝

○六月十三日年号御改元

○十月御郡奉行宮川治郎左衛門様御役替相極ル、御四人而御割込ニ成御受持宗像ハ遠賀鞍手ニ添嶋井市太夫様ニ成ル

○田畠払切年内切相仕廻

○閏十二月廿六日祖母死去助左衛門室 戒名貞弘法尼

○四月川棚入湯 山口参宮仕候

一 同 二酉年（一七六五）

○十月廿八日御地頭黒田惣左衛門様当村お出、十一月四日迄御泊座、上下八人

○四月廿三日 村正太郎母死去

○十一月五日のそへ貞伯死去

○野添卯三次娘於しけ六月朔日此方ニ養子

一 同 三戌年（一七六六）

○早賊強シ御免返上永田伊左衛門様御見分五十壹俵二升三合お下ケ被下

○九月廿七日死去母父伊作室戒名 順誓妙周信女

○酒とうし薙内村半助抱

○御郡夫仕組ニ成八百文宛夫錢一人別ニ出ス也

一 同 四亥年（一七六七）

○田作大虫御国中都而甚敷候へ共鯨油壹反ニ付三四合宛二三度宛さし候へハ虫除ル、春御免、鯨油不入村甚大痛也、米直段六錢貳拾六厘迄現米上納ハ上ル也

○虫除ニ粕屋鞍手御郡境ニ石坂と云所ニ明神述有、此処石ヲ受虫除候へハ何程石相増返納可仕旨誓願いたし申請、右ヲ田ニ付候へハ稲ノ虫除ル、併最早虫退時節ニ至リ候故ニ哉不祥

○氏神玉垣初テ建立

一 明和五子年（一七六八）

○五月廿七日夕雨降七月廿日迄旱魃、尤其内六月廿六日七月十日十一日三度少々坪水流程之潤有之候へ得共旱強故量少ク村中大旱損、七月廿日夕方廿一日迄大風、至テ之大風ニ而ハ無之

○御郡奉行富永甚右衛門ニ六月廿七日ニ被仰付兩粕屋宗像御受持ニ成ル

○当村氏神雨乞ニ泉水堀申候成就三日目ニ潤雨有之候

○田方御免返上貳拾壹俵御下ケ被下、村方甚困窮

一 同 六丑年（一七六九）

○田方大虫痛ニ而段々鯨油入候処漸々除候処八月朔日大風ニ而大損毛

但春免

○七月廿八日大地震有リ

○大損毛ニ而御納方大指留借立を以相済

御免書上覚

一 延享三寅年（一七四六）

お極田方御免 惣田高四百拾九石四斗八升八合

春石別三斗三升四合宛

現田數貳拾三町三反五畝七步

春反別六斗宛

一 寛保二巳年（一七四二）

田方石別五合御免御上被仰付惣田高春石別三斗三升九合宛

現田數貳拾三町三反貳畝廿壹步

春反別六斗六升宛

○おいく出生五月廿四日

一 同 七寅年（一七七〇）

○酒とうし武丸村長七召抱候

○去秋損毛故春ニ至飢人多し、右ニ付御公儀方御救米渡ル、当村六俵貳斗御借渡候、翌年方五ヶ年賦ニ而返納

○六月ニ間有六月朔日方田植初、五月廿九日ニ雨ふり六月廿三日迄旱

○秋作大豊年

○御国主治之公様 御家督被遊候 四月御入部

一 宝曆五亥年（一七五五）

田方石別御免壹合御上被成

春石別三斗四升宛

春反別六斗六升二合宛

右之通書上申也

一 明和八卯年（一七七二）

御国主 治之公様 四月御入部被遊

少將継高公様 御隠居被為遊候

一 同 九年辰年（一七七二）

十一月廿五日年号改元安永元年と成

○山田村抱長谷ト云処山ノ門とも云、当村新堤築立三月切相済候処五月

五日土手破損仕又々前之八合程土手築申候 大庄屋の坂徳七普請方庄

屋田久藤八

○二月江戸大火御国御中屋敷御類焼

○酒庫七月十八日繕初八月五日棟上

一 安永二巳年（一七七三）

○野坂大庄屋死去

○九月十七日おとら出生

一 同三年ノ年（一七七四）

○八月野添卯三首次男此方養子伊蔵と改名

○三月大庄屋田久藤八と成ル、普請方庄屋伊作請持ニ被仰付、給米拾貳

俵宛脇指御免

○水車初テ仕立候也

一 同四未年（一七七五）

○四月廿七日夕氏神神殿拝殿不殘焼失

○閏十二月八日氏神神殿建立棟上

○殿様方御継間ニ而御目見ニ被仰付二月廿二日三日両日宗像両粕屋庄屋

医師丹光岡新兵衛徳重村卯右エ門但し江戸御焼失之節寸志之面々斗

○六月十七日 少將継高公様 御逝去被為遊候

○赤間下西郷津屋崎ニ御郡蔵建、御用心御四米四千八百俵入

一 同 五申年（一七七六）

○御米大豆小廻候運賃被仰付、岡浦不和ニ而不殘御郡中津屋崎ニ御米大

豆津出候、同所方他郡他国之旅船積立小廻候相済、翌年方岡浦和順以

前之通之運賃ニ而又々五ヶ浦積立ニ成ル

○吉田武丸石丸赤間陵蔵寺徳重名殘藤原三郎丸九ヶ村御前納候に着相済

ニ成ル

○小廻出入ニ付福岡滯留津屋崎ニ積立ニ付出勤及数日候、米三拾貳厘

迄上ル

○長谷堤水吐石ニ成ル

一 同六酉年（一七七七）

○作並宜米直段ハ六十錢貳拾五厘方六厘位迄仕候

○表之蔵二間半梁ニ四間貳尺ニ立申候

一 同 七戌年（一七七八）

○作並中ノ下、米直段廿八九厘切米三拾厘八分迄上ル

○八月十三日おとら死ス

○十一月十九日おしけ赤間に縁付

○八月ニ元蔵建

○十一月ニ座敷次出候

○三月御宮神殿葺ニ致ス屋上師鞍手郡本城村之者賃錢四拾六厘包錢三

厘もめん六尺五寸、すゝき産子菅人ニ付四抱宛

一 同 八亥年（一七七九）

○吉留橋田川石橋四月□□致申候

○光岡懸稲元石新樋掛ル、田久鑑唐戸石ニ致ス

○水車嶋木壱本・細田添大町畦際小町畦下々壱間半程川之方ニ寄埋置申候

○黒田惣右エ門様御中老御次席ニ成ル

○八月三日大雨洪水遠賀郡ニ而出沙

鞍手内迄川筋村々不残水溢リニ相成田畠大損、遠賀今古賀村之内ハ家上迄水上リ申候

○当村黒田惣右エ門様御自分納ニ成ル

○伊蔵長七と参宮

一 同 九子年（一七八〇）

作並中

富永軍次郎様八月御郡方御見習被仰付

○田久鑑唐戸石唐戸ニ成ル

天明元

一 同 十丑ノ年（一七八一）

○三月卅日赤間万之亟出生

○四月十三日年号改元

○閏五月廿一日_カ旱六月廿二日少軒水落候程之雨有リ、廿七日近郷十ヶ村程坪水流程之潤雨

○おいく閏五月ニ傷害相煩心遣仕候

○田方夏虫連入又秋虫強ク不作

○九月十七日夕赤間中町出火表向十五軒焼失

○御国主治之公十一月廿一日逝去 実ハ八月廿一日御逝去ニ候へ共次第有之十一月廿一日御披露

○大守御養君讃岐タトツノ城主京極家御舍弟 又八様十二月十八日此方

様桜田御上屋敷江御引移被為遊候

治之公御戒名 鳳陽院殿四品拾遺前筑州大守典山昭請大居士 御才三

十三

一 天明二壬寅年（一七八二）

○大守二月七日御登城御任官

筑前守治高公從四位下侍從ニ被叙任、同五月朔日御入部御着城也

○隠宅二月廿六日棟上致ス

○畦町清五郎母伊作姑三月四日死去

○正月廿九日_カ同二月朔日迄大風至テ裂風ニテはしの実不残落ル

○五月七日同大風

○米穀惣テ高直六月ニハ六錢三拾四厘迄上ル米壱俵直上ル

○七月廿二日洪水 釣筋穂水痛強

○八月廿日夕大風転家転木多し高汐満

○九月五日夕少大風

○国主治高公十月廿四日逝去実ハ八月廿一日之御逝去十一月三日東長寺江御入寺被遊候

○御相統様 雅之助様被為濟 一ツ橋

刑部卿様二男様也

一 天明三卯年（一七八三）

○田方不作御免返上当 五拾壱俵半御下免

○諸国不作米直段壱俵四拾八匁迄成ル

○七月信州浅間山焼數十ヶ村人家出水ニ而流候由

○殿様御幼君ニ付長崎御番御家老御受持ニ成

○諸国飢饉ニ而穀物高直年内六錢四拾七八厘春ニ至テハ五拾三厘ニ成ル 大麦ハタカ五十目ニ至ル

一 天明四甲辰年（一七八四）

○四月九日ヒル八ツ時吉作出生

一 田畠豐作 六月大洪水ニ而東郷内川土手大破

一 氏神拝殿建立十月廿九日棟上

一 猪鹿打払三月朔方八月廿九日迄御免

天明五乙巳年（一七八五）

一 春雨不降四月十五日大雨洪水、夫方根付雨しかとなく堤水ニ而麦尻ハ

水取根付致ス、村中之古田是又根付無之六月廿四日迄旱魃、廿四日ニ
坪水流程之潤有、夫方五日程少々宛雨漬リ

○七月十一日夜過大風

○御免返上三拾俵三斗御下免 秋石別

○十一月十四日富永甚左エ門様御隠居御郡奉行御子息軍次郎様御相続也

○裏小倉建替 九月廿六日棟上ケ

天明六丙午年（一七八六）

一 正月元日 日そく（日蝕）

一 伊作夫婦二月四日方參宮西国順礼四月廿八日迄八十四日

一 六月土用中雨続く

一 田方大虫併鯨油指し申候処追々退申候壹反ニ三合四合宛二遍強虫ハ三

遍入申候一日にても鯨入延引程痛強し 春御免ニ□□□

一來迎寺庫裏普請

一 公方様九月八日 御蒙浙被遊候

一 馬屋長屋普請致候

天明七丁未年（一七八七）

一 公方様三月十五日將軍宣下被為濟

一 四月永雨ニテ麦作六歩程腐捨リ

一 米直段六拾五匁迄上ル、筑後ハ七十五匁迄上ル、麦五十五匁迄上ル

一 麦作田畠豐作 田方四月植初テ根付仕ル

一 七月十七日赤間郡屋焼失

一 同月水車上ニ登せ申候廿八日家棟上ケ

一 四月新御役人御免用方御立被成候

一 兩粕屋宗像三郡御受持高屋市藏様御添役久野十兵衛様

一 御郡目付十兵衛様跡堤曾右エ門様ニ成ル

一 七月十七日赤間郡屋焼失四ツ時

一 十月御免用方高屋市藏様遠賀鞍手御受持ニ成ル御役此方三郡頭山伝太

夫様ニ成ル

一 八月廿五日伯父正兵衛死去

一 四月本木大庄屋被召上跡大庄屋村山田ニ成ル

一 九月五日和吉母死去

天明八戊申（一七八八）

一 赤間郷十ヶ村お宮公事方争論

一 正月晦日方二月三日迄京都大火

御内裏炎上

一 四月十日土穴村ニ而御免用方頭山伝太夫様方大庄屋役被仰付、御郡奉

行ハ富永軍次郎様なり、干時歳五十四才伊作転役

一 松平越中守様江戸御老中上席

將軍補佐と御成被遊

一 年内順風無之、御納方小廻不相濟、翌正月払切ニ成ル

一 当村庄屋五月十一日伊六ニ被仰付

一伊藏娘おさん十一月八日九ツ時出生

一赤間郷郡屋普請有ル

一酒造此方止ル

寛政元己酉年（一七八九）

二月三日御改元三月三日御触参ル

一御巡見使御下向小笠原主膳様御茶屋

黄印

土屋忠次郎様町茶屋

青印

行田吉十郎様御郡屋

一三月十二日大阪御着

同廿八日若松郷着岸廿九日同所御滞座

四月朔日芦屋御泊リ同二日赤間御泊三日雨天ニ而御滞座四日五ツ時御

出駕青柳御泊リ

一公料御巡見六宿通り四月十七日木屋瀬御出立内野御泊リ

一氏神神殿表側算替、彦山山伏四人参、日数三日掛一日一人に付賃錢百

四十文宛

一大石津屋崎堤内輪地御詮儀渡リ村ニ而五月有リ

一根付雨延引五月中廿八日潤雨六月十日雨降十一日迄後と潤

一六月廿六日大洪水

一田畠共ニ八九分ノ作並也

一伊作居宅建替九月六日棟上 大工

一長崎奉行水野若狭守様十月十日赤間御着休

寛政二庚戌（一七九〇）

一国主雅之助様九月十五日初御登城筑前守斉隆公ト申上奉

一正月大阪大火

一宝満修験中峯入四月五日六日孔大寺泊リ

一御免用方嶋井長市様ニ成ル

一当村疱瘡流行 吉作おさん痘瘡致ス

一東郷亀ヶ淵底唐戸御普請

一米直段冬式拾八匁位公納三拾目

一釣川御普請ニ付画圖出来ル

寛政三辛亥（一七九一）

一釣川凌御普請洲口御堀切三月廿一日六四月朔日迄

御郡奉行様免用方御出郡御普請有之候、夫数式万六千人程

一釣川凌川幅御定傍示石立

一四月長雨麦作大痛平均四歩位

一五月中六月廿二日迄日々雨天尤其内二日続候晴天ハ十七日八日其前ハ

間ニ一日晴候義僅有之候

一十月十五日浦上数馬様御郡御浦共々御用引切御請持ニ成ル

一十月十五日夜八ツ時大地震

一氏神額吉田從二位良俱卿之御毫ニ而掛ル細工鷹取宗哲

寛政四壬子（一七九二）

一正月廿六日畦町駅大火百三軒焼

一光岡邑入百姓十三軒御仕居銀式拾九貫七百六十式匁式十ヶ年賦ニ而

拝借

一二月田野邑ニテ海獺ト云海獸上ル

一肥前国高来郡温泉嶽之内普賢山正月十八日ヨリ烟吹出シ追々焼立火地

震強、三月十八日ヨリ焼至テ強クナリ四月朔日暮六ツ時前山ト申上リ

二里程ノ山二ツニ割崩海中ニ押出、海上津浪打上城下數十ヶ邑打崩、

死人國人一万四千余掛リ、舟数百艘埋レ死人幾千ト云事不分、其上向
フ地肥後國三十ヶ邑余大浪打上死人、五千余ト云

一御城内新殿去今兩年ニ御普請成就

一三月廿八日夕赤間宿田町出火十五軒焼失

一沖島正三位ノ御社三月 焼失之由

一伊藏三男喜代助四月廿二日戌ノ上刻誕生

一閏月二月ニ而五月中三日根付雨少早水取ハ四月七日夫ハ四月廿九日ハ
五月朔日ニかけ坪水位雨有之、井手掛リハ堤水取合水取ニ成同七日夕
ハ八日迄又坪水位ハ少宜候ニ降、柿木谷平原迄水取根付成、併一向ニ
天水ノ水取ニ不成、触中ニ而四捨五町程根付不成処五月十九日夕廿日
迄掛後者潤雨夫より漸惣皆作ニ成ル

一六月上旬ハ蝗余分ニ致出来候ニ付銘々才覚鯨油猶又御上ハ拝借を以
買調被仰付候鯨油一反ニ壹合五勺宛之積リ其外自分才覚之分ハ壹反ニ
三合四合宛三度宛程ニ追々入候処漸蝗退候毛上出来込ハ至テ宜悦居申
候処

一七月廿二日夜五ツ時大地震

一七月廿三日夕大南風ニ而出穂不残白枯穂成ル

一同廿五日ハ廿六日迄又々大北風吹残穂追々出申候処大方靱黒く成候て
至而凶作、当村御免返上御見分之上御徳白米百六俵九升九合上納

一諸上納米三品銀不残御用捨尤右別御免壹斗己下不残御用捨式斗己下割
合ニ而御用捨式斗以上御用捨ナシ

一御國中ニ而御免下リ式拾万俵程

一宗像郡中ニ而御免下リ

一十二月二日夜五ツ時大地震虚空鳴動万雷ノ如シ浜山引割候所も有之堀

石垣等損候所も有之候

一御上ハ拝借油代ハ拝領ニナル

一十一月地島ニ南京船漂着長崎之湊ニ参也

一八月ヨリ凶作ニ付酒造御指留、十二月ニ成造株半石御免酒場運上銀半

減ニ相成、翌四月御運上御用捨ニ成

寛政五癸丑（一七九三）

一殿様二月廿七日江戸御発駕四月十四日赤間御泊座、十六日御着城、

御名筑前守侍從齊隆

一正月より四月迄始終雨降麦作損毛、漸取実五歩位

一二月廿四日日夜四ツ半頃大地震有リ夜中ニ四度地震同廿五日又夜四ツ
半頃大地震あり

寛政六寅（一七九四）

一作並当分ニ而直段廿九匁位下ケ年中無事也

一六月廿四日夕木戸石垣ノ上ニ捨子有之、此方取上ケ養育いたし候事尤

御注進申候処寄特之段御書出頂戴被仰付候事

寛政七乙卯（一七九五）

一殿様御逝去八月廿四日御家督御嫡子 松次郎様御相統被遊、御改名

官兵衛様、当春御出生也

一六月中旬ハ蝗夥數郡内過半も返免ニ相成て当村ハ春御免請留大豆作毛
上るて実入少シ悪シ

一米直段廿九厘ハ十一月末ハ四拾六厘七厘位翌春ハ五拾五厘也此外無事

寛政八丙辰（一七九六）

一作並当分蝗少々出来田作ニハ大障リなし 風も八月五日十一日二度有
之候共得共大障リなし

一 七月晦日朝四ツ時おいよ誕生

一 田作秋ニ至劣リ而米直段四拾貳厘位大豆三拾三厘四厘位

一 八月水車作事いたし候事

寛政九丁巳（一七九七）

一 四月長瀬手川ノ拾五間程中土手築下ケ須恵田地貳拾貳歩費ニ相成、弁

米壹斗四升土穴村々請取筈、同村水引惣敷有之就願ニ付御普請済

一 五月二日十二日甘露降り候由奈良の木榎木の類ニハ付居申由ニ而段々

取見候事世間一統取沙汰いたし候事

一 八月十二日御呼出ニ而郡中産子養育目付役被仰付脇指帶ノ儀御免之事

一 同月四日大雨ニ而洪水くき田切込小石入五畝而程其下ノ苗代致居処あ

ずさきニ相成壹石時程埋り候苗ハ作分取合を根付相仕廻土手築かわら

揚御郡夫被御申請候事、同十三日御普請相済十五日根付済

一 同十八日大洪水ニ而くき新土手廻拾間程又々切込最前之通小松原方八

間程切込此方抱ノ内ニ六畝程かわら入出来ル平田土手破損所土手長拾

五間程切込かわら入四反面程出来夫方下モ大洗いたし田地埋り候事平

田方上モ石井手迄土手半崩処々出来候而夫数千五百人之積リニ而翌午

春御郡夫御加勢被下御普請済併跡繕分自分手間百人余手入候事仮成

之田ニ相成候事然処午四月廿一日又々平田八間程新土手切込かわら入

三反程ニ相成

一 十一月方十二月迄の間米三拾壹厘位

寛政十年年（一七九八）

一 正月廿九日夕福岡荒戸方通町方新大工町大門寺町迄焼失殊之外大火

一 四月十二日方十五日於会所御酒頂戴被仰付候事、寛政四子年大變年に

て村内極貧窮百生へ米錢之間救切ニ相渡候面々御讃被下候事

一同廿二日洪水ニ而平田八間程切込かわら入三反田程半崩所々出来

同 十一末年（一七九九）

一 二月御郡奉行嶋井仁左エ門様御成□□死去

一 八月廿九日夕風損ニ而少々出穂ハ相障候事

一 十月中頃

殿様赤間御成小屋瀬□□御移六宿通御帰城

一米直段三十壹式厘位九月方十一月中頃迄夫方師走中三十八九厘位

同 十貳申年（一八〇〇）

一 四月五日ヨリ御出駕ニ而

殿様浜筋御通行六日勝浦御泊座田島宮

御社参ニ而釣筋御通稲本字藏宅御小休、赤間御泊座、直方御社参

一 酒場のうら井戸去十一月方取掛り雨天勝ニ而当四月成就、九百目程

一 井戸際石垣長十間高七尺仕、賃七百七拾目懸る

一 九月

殿様御参勤被為遊、箱崎松原御目見被仰付筈ニ候得とも病氣ニ而お断

申上候事

同 十三四年三月改元

享和元年（一八〇一）

一 六月ニ而候嶋井仁右エ門様奉行役御退身之願相済、跡御郡奉行天野弥

一 石エ門様成、荒戸五番丁御山之下

一 三月座敷普請致

一米直段三拾六厘位、大豆廿六厘位也

一 田畠作当分之年納

一 四月廿七日伊作妻呼、田熊甚五郎娘

享和貳戌年（一八〇二）

一五月十日夕大洪水ニ而川土手破損致候而、夫々築立ニ相成居候処、又々同月廿九日大洪水ニ而五反田并子すへ渡くき平田婦け処分切繩手和田新樋不残破損ニ相成石入荒地分出来いたし夫高千六百人斗

一田作当分之年納、米直段三拾三厘くらい

一大豆作六月旱ニ而万物不宜、中ニも大豆一向根付不相成、所ニよ里根付いたし候所も生出得不申ニ付大豆直段三拾貳厘位

享和三亥年（一八〇三）

一閏正月六日方伊蔵妻西国順札旅立無滞納札相済、伊勢、御参宮是又首尾能相仕舞、三月廿七日帰着、都合日数八十二日

一春中雨天打続麦作等甚よろしから須、夏中潤雨十分、尤地水多田作旱魃なし

一七月七日大概潤雨有之、其後言語同断之大旱、同月廿一日さつと坪水流候程之潤雨有之候得共田畠等之用立不致、端々等日病ニ相成申候、八月の中雨無、大根蒔等一向被致不申、水汲又ハ早田刈上跡等ニ蒔付申候、其後漸九月三日少潤雨、夫方追々打続相応之潤雨仕候

一秋米直段三拾日位、大豆三拾三厘位

一十一月廿七日瀬十郎誕生

三月方文化と改元

享和四子年（一八〇四）

一香椎宮奉幣使御下向、三月十日赤間御休、青柳御泊座、十一日奉幣無滞相済、又々青柳迄御引歸し御泊り、十二日赤間御定首尾能済

御茶屋御入

四辻左中將様 奉幣使

町茶屋御入

山路勝河守 雜掌

其外御役人六十人計

伊作事綿屋金平方宿亭主被仰付、八日方入込無滞相仕候

喜代助事御茶屋給仕人ニ差出、是又首尾能相勤候事

一六月七日伊作妻死去、家内大勢病

一作並大体ニ而米直段廿五六厘位

一畠作損毛ニ而大豆三拾六七厘位

文化丑二年（一八〇五）

一春中日和続ニ而麦作毛上至宜相見仕候処、四月ニ長雨有之候而、麦安等腐り実入不宜、直段大麦廿五厘位、裸廿八厘位

一五月十六日方御役所居村庄屋役被仰付

御奉行天野弥一左エ門様、当年伊作廿二才

一四月中旬方大旱ニ相成、五月中一向無潤雨、井手懸りハ堤水ニ而水取、五月廿五日方根付六月三日迄ニ水取相済、水取残六反程、大豆根付位ノ雨六月五日六日両日降候、併天水之水取ニは不相成

一六月十日大体之潤雨ニ而当村皆作ニ成ル、併シ其後一向潤雨無之候而其儘引付ニ成リ大旱魃、夫方七月廿七日夜一時斗之太白雨也、其間々ニ埒湿り位ノ雨八度候得共大乾ニ而一向用立不致

八月十七日十八日両日潤雨有之、又々廿一日潤雨少々有之候而一篇ハ作分走り渡ル位、始終潤雨少而返免致御下免、当村米百拾三俵余返免付触内六分ほと有之、志かし余国宝作ニ而米直段三拾目位、大豆上作ニ而廿九厘位

一御免返上当村百拾三俵余御下免

文化三丙寅（一八〇六）

一 三月御目附土屋帶刀様お茶屋泊座、御勘定吟味役松山惣右衛様町お茶屋泊座其外諸御役人十頭州対御下向

一 麦作上毛ニ而実入もよし

一 夏内潤雨少候得共早付候程ニ者無之、秋作豊年ニ而米直段廿六厘位

一 大豆作中分之年柄

一 八月酒造藏建替柱根吹合堅屋根等仕替ル、仕調一切入切錢貳貫五百目程掛ル

一 十二月三社御祠新ニ建替申、大工、平等寺利平

一 十一月十五日喜代助元服致、平三郎と改名

一 十二月御宮内普請致作料金具代一切八百目程掛る、大工平等寺利平

文化丁卯年（一八〇七）

一 春中天氣統能、麦作大概也実入至テ宜敷

一 御家中御仕組ニ而両市中及郡々頭立候銘々出銀被仰付、一季六朱之利合被加廿五年ニ而御渡被下、両市中ニ而六錢八千貫目相調、其余郡々貳千貫目、内百八拾貫目宗像郡中ニ而上納、壹貫目伊作出財いたす

一 根付雨十分ニ無之、一統雨云等致、尤当村ハ速ニ皆作ニ成、六月七日頃方潤雨続、同十三日大雨、川々一升之洪水、同月廿四日又々八合

程ニ洪水、破損ハなし、田方、一統蝗付、鯨油貳参匁迄さし渡ス、盆

後ニかけ又々蝗出来所ニより油三廻入

一 八月二日亡父三周忌石碑建立、石工、新宮、新助竿石いむた堤谷方持出、三十人荷、地輪地輪志めの山方取、石工手間廿六人、其外雑用共

貳百五拾目程入切

一 世間不宜、米直段四十目位、尤返免村ハ無シ

文化五辰年（一八〇八）

一 春内雨氣薄く三四月至テ日和統宜、二月対州御下向御役々様、赤間御泊座御同勢凡百人程、伊作御宿亭主出勤

星野鉄三郎様

土屋源次郎様

野沢半之丞様

一 三月酒屋上塗致、諸所手間共凡六百目程入切

一 灰屋塀練三間三方、三月方取掛ル、賃錢百廿目程受

一 麦作大概、直段二十三厘位

一 秋作中、米直段三十六七厘位

一 大豆上作、直段廿三四厘位

一 十一月廿四日大島郷江朝鮮舟漂着、廿五日津屋崎江御漕入、御出張ノ中老斉藤甚右エ門様大目付木山喜太夫様其外物頭御同勢二百人余、伊作出勤致ス

文化六巳年（一八〇九）

一 二月晦日方伊作伊勢参宮致、同人妻并妹イヨ下人喜七相連参五月廿二日帰宿候処もはや田畠根付相済居申候、夫方一向潤雨無之、大旱ニ

而、段々御上方も雨乞御祈禱被仰仕候得共、一円雨なく村々焦損ノ田多出来候内、当村ハ盆過迄ふり続、八月上旬より潤雨有之、尤村三步

通ハ病田出来候、稲元土穴辺者返免ニ相成、志かし諸国宝作故ニ而、米直段三十六目位、大麦直段廿五六目位、全体つまり候世ノ中ニ有

之候

文化七午年（一八一〇）

一 春中天氣順なる年にて麦作毛上宜敷、実入も相応にて、直段大麦廿壹

目位

一四月廿七日妹イヨ大島沖吉屋佐藤大藏方へ嫁らす

一根付潤雨等も宜敷、速ニ田畠皆作始終順ニ潤雨有之、夏畠作上毛也

一秋作早田者吉中、晩田殊之外秋おとり也、尤直段三十目位、大豆作惡

シ直段廿七八目位也

一伊作女子通十二月十六日朝六ツ時出産也

一十二月来迎寺本堂普請事也、凡普請錢六五貫百目程、此内壹貫目程此方寄附

文化八末年（一八一二）

一殿様齊清公御帰国、三月十四日夕赤間宿御泊座、御家老大音六左エ門様野村新右エ様其外御同勢千人程、半備ニ而御帰城有之候也

一朝鮮国方对馬迄訪使来朝ニ付小倉城主小笠原様舟ニ而四月三日当国浦お通舟、同夕嵯島江御泊座、舟数百艘ほと、諸国御馳走漕舟三百艘ほと、右来聘ニ付脇坂中務太夫様林大宇頭様其外御目付方对州江御下向也、三月当国六宿廻御通駕有之

一麦刈上混納頃始終日和続ニ而速ニ取あげ相済、実入大概也、直段大麦拾八九目位、右日和続ニ而田方水取村々差支、五月中ノ日大雨ニ而川筋ハ又々水つかりニ而難儀いたす、当村ハ七日八日頃方植申候

一夏中相応之潤雨にて田方中分之上作、尤八月洪水ニ而腐別す穗水ノ病有之候也

一米直段三十目位

一大豆直段四十目位

一大麦直段十八目位

一小麦安廿六厘位

一大豆作出来込十分ニ有之候処かれこれと相成、志いらかちニ而も入実候而虫付ニ而惡、不作也

一殿様東部御巡見、十一月十四日赤間御泊座

文化九申年（一八一三）

一麦作大概也

一夏畠作上毛也

一田方根付水少く村ニ寄堤水ニ而水取ニ相成、五月十七日方植込、廿五六日頃皆作ニ相成候

一太惣居宅春二月甲子ノ日斧立六月中頃方工所大勢入込八月二日上梁素建、大工四百工木挽式百工程之積り、建前堅六間五尺横四間ノ五尺、此外式間式尺ニ五尺納戸建、棟梁大工平等寺村弥平

一年中相応之晴雨にて無事、田畠作並上作と申内、山添村々ハ出来かたく植ぬけに相成

一米直段 三十目位

一大豆

一大麦 十八目位

一小麦妻安 廿八日位

一本邦穂波郡平恒大保長畝平 上ヲ掠メ阿順之衆に檢セリ、下惡ム、忍ぶに不堪、乱を那して家宅を壊けり、春三月九日の夜也

上に聞ユ畝平罪当死ニ斬ら留、民又党セ留の罪アリ、海島に流さる者十余人也、其他似た留小事間々あり上聴に達せ須して治留
一当年方櫛蠟座仕組止ミ、在々櫛木ニ掛り、老斤ニ付錢老文宛運上、上より取り給ふ事はし満る

一十二月十八日保吉生

文化十酉歲（一八一三）

一 春季雨少し、麦作甚悪し、三分の一也、富家皆糧不足況や小民に於而
おや、大ニ追ル、夏四月無雨、禾不殖、五月後有雨皆殖ユ、其後雨甚
多し、蝗災アリ、秋ニ至つて実少し、都て万作に及へり、貢を苦しむ
ニ至ら須、米一俵代錢三十一文目位也、先年方国札アリ、便利よし、
今甚不宜、不行して錢一文ヲ以武文ニ易ユ、米一俵価六十目余也、万
是に準ス、依テ質物田畠多く受戻りになれり、大麦直札五十目、大豆
六十目、從て欲買者多し、欲売者少し、皆錢ニ易るに利阿留か故也
一 八月方穀類旅出なら須、浦島の者正に餓んと須、故に証拠を以郷より
買是を以て上ニ申ス事二旬の間を以て須、年尽れとも不息
一 貢乃内糶開アリ、本邦ニおいて十万俵ニ及フ、敝色九俵開ニなる、糶
開の事列国志かり、天下よりの令也、大坂穀物入津留れり、然れとも
買舟ニかされる

一 太惣娘キタ冬十月十二日夜亥の下刻に生ル

文化十一戌年（一八一四）

一 春季風調雨順にして麦作大ニ美、上下糧足れり、代錢国札を以四十
目内外錢ニ而十七八文目ニ当ル、此時国札大ニ乱て正銀壹匁ニ付札式
百四十文を以易ル、上より大札と相唱る所の銀錢百目已上之札悉く引
上ケ給ふ、依而十八年賦にして渡給ふ、以下小札尽ク四分ニして銀正
錢ニ易渡し給ふ、凡国札有高六万貫目に及ぶと言風説也、外ニ櫛鱗座
仕組の札有り、融通不止、五六月之頃ニ至正銀壹匁ニ易類処四百廿文
ニ及へり、米壹俵百七拾目、万穀準之、窮民多し、七月初ニ國中ニ触
れて蠟札十厘を正錢三厘ニ而融通可致と示す、皆以て行ふ、九十月ニ
至上ニ引上ケ給ふ、之より三分なり、五月雨無之候て稻不殖、郡内村

ニより田方三分通りハ豆を作れり、夏天雨多くて蝗災アリ、故に秋穀
存分に不登、邦内所として返免アリ、本郡久末触内六ヶ村返免、総て
田方大豆を植たる村也、大豆甚凶作也、然とも国札止て邦内の財用甚
薄くて都而買入不商、就中質屋尽く渡世を止む、故に米直段正錢ニて
三十三目、大麦廿五目、櫛実拾二文也、余ハ準之、冬に至て世間とも
大ニ迫り錢に勞須る者無限、故に冬季方穀物旅出を免給ふ

一 水車新溝寺の前方水車所迄持阿らて（荒手）人夫各中八十人春廿五人
都合百五人、喰土日用式百文宛也、杭一本正錢廿七文宛、笹ばね壹巴
八拾文宛、凡惣入切六百目程

一 伊作母五月十二日病死ス、林鏡院ト号

一 井戸十一月三日方取掛リ十二月末ニ出来上ル、土持三四郎久次作次三
人ニ而堀方受負、此方賄なり、正錢三百四拾目其外唐鍬先かけ類の入
切ハ手元方出ス、石垣石廿壹坪余なり、一坪ニ付石屋作料拾五厘、石
井方取寄、賃錢一坪ニ付十五厘宛、井戸棟上として三四郎ニ木綿壹反
遣ス、惣入切壹貫貳百目程、此外上家一切除ル、井泉水見として粕屋
郡小竹村伊兵衛と申仁ニ相頼志らふる也

一 御奉行小河織部殿遠賀郡お懸リニ相成、当縣御懸リ八田九門殿ニ成ル

文化十貳亥年（一八一五）

一 春中天氣順、麦作不宜、壹俵代錢貳拾三目四目位也

一 室場春普請致、凡代錢四百目、其外大工賃材木不分候ニ付不記

一 前家場方先作り次、大工数六十工程掛ル、其外木挽賃材木不分候ニ付
不記、土台下石垣石拾三坪、壹坪ニ付代錢拾目宛、柿木谷辺方取寄、
駄賃一坪拾厘宛ニ而村七頭馬ニ而付ル

一 田方夏内天氣不揃ニて蝗アリ、油少宛入レ無程減ス、秋に成実入並、

秋になり直段三十壺目位後次第に錢持屋等直段引下廿七八目ニ成ル

一林鏡院石塔建立、代錢百六拾日ニ調

一十二月廿一日太惣別家徒移致ス

一十二月五日太惣男子源五誕生ス

一下関方絵師岸六来リ、別家立具不残画ス

一木屋瀬方表具師仲悦来リ、一切張立ル

一酒場裏納涼座敷立ル、四畳半敷壁廻リ不張付、大工百人阿まり掛ル、

一切一入切壺貫五百目程入ル

一右座敷普請致ニ付、流水場立替北側ニ引退新規ニ立

一御奉行九門様御掛替、森武左エ門様ニ成ル

文化十三年(一八一六)

一春中天氣順ニして麦作常並

一伊作儀御役所御呼出ニ而光岡村上見役被仰付、一ケ年郡切立方三俵宛被仰付

一夏内天氣不揃ニて蝗多、村中一統油二遍或ハ三遍入者アリ、しかし大痛い不致、秋ニなり出穂美敷見候所、晩秋ニ相成取上致候処、全体夏中雨天勝ニて毛性不宜、大ニ実ぬけ秋おとり致、返免相願候とても不苦位之作付ニ有之候へ共、郡内一統返免なし、百姓糧物難致ス

一米直段三十七目位、御借錢四十目位

一大麦 三十目位、畠作一切不宜

一春御免壺升壺合御上ケ、村右別三斗九升三合ニ成ル

一御免御扱之儀、明和元年方公儀御怠ニ相成居申候年数五十ケ年振、当年方取起て相成、三ケ年廻リ四ケ年目ニ御改御免御扱有之趣御達有之
一八月十八日太惣女子喜多病死ス、観夢童女と号須

一十二月七日伊作病死ス、号雲平居士ト

一太惣儀酒造米御指紙之儀ニ付忌中なから一七日夜立ニ而出福致居候

処、逗留中同月廿一日御役所御呼出ニ而伊作跡庄屋役被仰付

一伊作成行ニ付本家婦人暮しニてハ当時財用指交候時節何分相立間敷ニ

付、一族中立会評議之上太惣儀本家へ入込、保吉相統致候年令迄世話

致、伊作後室其外太惣祖母伊作女子三人保吉相連太惣別家へ暫引移

ル、保吉五歳なり、其節評議打寄の面々左の通、山田村花田道明、大

島浦佐藤大藏、稲元村卯三次、同村庄屋初七、赤間駅新屋甚助、同宿

勝助、畦町清五郎儀不快ニ付出席不相成、文通ニ評議之存寄申来ル

文化十四丑年(一八一七)

一春中天氣平順ニ而苗代耕等如累年、麦作中分ノ下

一麦直段

一田畠根付天氣宣敷ニ付速なり

一夏中潤雨勝にて水引等ニ心遣なし

一太惣□旧家(伊)作後室宅前路沿門建立、非人物□等入込候

一七月来迎寺仏壇北側式方構造作障子立内門板張ニ致ス、大工木挽四十

工余掛ル、其外材木等除ル

一秋作中分、実入至而宜敷候へ共夏中雨続にて毛症不宜、大ニ把少く併中の作並なるへし

一畠作一切上作、大豆等近年上之上作也、志かし近年打続畠作極悪作なりし上なれハ宜敷様覚候物なるへし

一是迄自作相止居申候へ共、村分下田疲衰ニ付当年始而三町程自作致

一去年不幸ニ付諸指引不濟、手元指支多し、夏中糧米買入致、凡三拾俵余、代錢四十壺式厘也

一秋米直段三十一式厘位 御差錢三十五厘位

一大豆直段廿五六厘位

一十月十二日保吉妹さい病死ス

一十月末頃武丸村大庄屋伊豆善左エ門退役被仰付、十七ヶ年以前横死人之事ニ付只今ニ相成御咎メ被仰付候、勝浦村大庄屋源五郎も右横死人ニ掛リ合筋有之、同日ニ退役被仰付、跡大庄屋役赤間村卯右エ門ニ被仰付、勝浦跡役宮司村忠右エ門ニ被仰付、宮司村ハ久未触ニ加リ居申分、此節改而先勝浦触ニ被加、宮司触と相成ル

一雲平居士一周忌供養ニ付石碑建立、銘文妙湛寺蘭谷書ス、真珠童子石碑茂同時ニ建立、石工鞍手郡長谷村九八、塔代錢貳百目

一稲元村叔父卯三次近年世帯向指支多、仕組立致諸方借財道付、家屋敷田畠不殘売払申ス、手元去子年取替候元錢貳貫七百目捨リ致遣ス、外ニ田地式俵余米卯三次過佐料ニ遣ス、老人存生中養育料として年々米三俵宛遣ス

一畦町幸六仕組ニ付手元借付錢三百目余捨リ、外ニ百五拾目現錢加勢遣ス

一居村百姓内八人稲元村むた田受作致、凡百俵付口程当年増作ニ致、下作水田年ニ付作並宜敷、作徳百俵ニ及

一去年来指支多村々一統冬詰り致、差引筋大差支致ス

一櫓運上御免ニ相成ル

一十二月大島浦へ異舟漂着、津屋崎へ漕入ル

文化十五寅年（一八一八）

一正月元日朝、日輪二輪出て、其間凡二三十間と見ユ、五ツ時過頃消失セ申、予考ニ怪むへから須、天氣の模様ニよりて出来たる物にて、大

方此わたり見る迄にて、所により国によりて見ゆへから須

一春中天氣順にして大低農業仕事博取、田方付下し居合は宜敷有之候へ共、自作ハ去年之通ニ致

一村内之者稲元牟田受作去年之通受作致

一酒場裏溝際石垣并下稲屋安平境石垣破損致スニ付、此際石垣仕直ス、溝底松木土台を敷丈夫ニ仕直致ス

一春中早勝ニ而麦々かり入、地元輕浮なる浜付杯ハ別而大痛致、湿地ハ不痛

一郡方御役所此節新ニ大名町齊藤様古屋敷ニ御造有之、五掛リ御奉行門役所不殘相止、各此所ニ御出勤有之、尤御裏判御家老も御一人宛御出勤有之由、此節仕方御立替ニ相成、郡方免方両役所ニ御引別ニ相成、是迄内役所詰之組衆之内七人御免方御役所ニ引分、十式人御郡方御役所ニ引分ニ相成、夫々請持調子筋有之御納方郡用方を郡方役所、御免用普請一件者御免用方、勿論御免一件之儀者免方受持、併而役所立わけ之儀者内分之儀ニ而表立之節ハ郡役所と相唱申事、此節新御役所ニ大庄屋村役人据所、百姓腰かけ等御立方に相成候、至而大造なる御普請也

一新稲作の野小松原御免御定ニ相成、当夏畑帳名寄帳仕直ス

反別三斗七升代ニ御極

一唐津水野和泉守様御国替、遠州浜松御城主ニ御転居、唐津ニハ奥州棚倉小笠原主殿頭様御引移、双方御往来三月始々夏中夫留中は御通方茂く、人馬出方甚多し

一四月々痘瘡流行、村中耕不仕程なり、安痘為祈願稻荷堂石室建立す、病児凡四十余人、惣て安痘なり、二人死失阿リ

一五月廿八日太惣惣男子源五難痘にて死す、隣教童子と号す

一田植村中一統相應に根付済、手元ハ不幸ニ付不仕廻

一麦作悪、惣敷百姓困窮致ス、直段三十目位

一夏中蝗多く油三四遍入、例年の虫方手強程に移る、公儀ハ油拝借触内凡五十丁ほと

一秋作実拔甚敷上納指支の所多し、村内ハ油入方手拔不致候て、実心宜、米直段廿八厘位

一大豆作此辺上作、夏大豆不宜ニ付直段廿八厘位

一御奉行五人御國中惣懸リニ成、雨粕屋宗像御郡代ハ竹森安左エ門様小伏丈左エ門様免奉行兼帯

一福岡表紙役所炭役所引払ニ成ル、跡ニ者御米中出蔵御用ニ相成、古蔵凡三間に三十間、新蔵凡四間二十五間と聞候

一鞍手郡十八ヶ村御免返上検見の節、荀畦或は不毛の田地有之不吟味ニ付大庄屋四人退役、村により庄屋退役其外科人多し、或ハ遠島もアリ

一黒田様御年縄かさり当村ハ仕出、十二月廿一日ハ出夫貳人、晦日ニ帰る、年夫納物一切御除ニ成ル

一太惣女子千代十二月十九日夕亥刻ニ誕生ス

一当四月改元にて文政元年と成ル

一先年野坂村堤破損之筋朝町村之救出良候御称誉として御酒裂鰯頂戴被仰付

一黒田惣右エ門様ハ太三へ御羽織拝領被仰付

文政二年卯年（一八一九）

一春分順暖にして非常なし

一夏分天氣ハ順に有之候へ共当年又々蝗災あり、志かし大痛ハなし、作並常ハ宜敷方

一麦直段二十目位より冬に相成次第第二下直

一米直段早米に廿五厘位より日下りに相成冬に押詰廿目位ニ成ル

一大豆二十四厘五厘位

一当御郡代竹森安左エ門様古野惣エ門様ニ成ル

一御郡奉行小河織部様八田九内様喜多村勘太夫様小林武左エ門様四人以前方御在勤也上原源一郎様御退役壱人欠ケニ相成ル

一当年御免御扱年郡内所々ニ高免下免有之、当村ハ三ヶ年己前高免の通り居り合

一冬十二月二十五日福岡大火、職人町ハ呉服町名島町大名町土手の町迄焼失

一同廿九日青柳町大火、一宿ことく焼失、西の出口店屋三四軒残ル

一当冬波津浦にて海獸捕ゆる、先年鐘崎ニ上リ候海獺類の物なるよし、又箱崎に大なる海獸捕ゆる、尻より頭まで壹丈にあまるよし、重きこと六百斤、尾誠になきか如し、いささか有之よし、異獸なれとも海獺類なるへし

一当秋稲元村抱野添の前田久村水引川尻御普請御仕調済、船底宮拝殿取除、其下川底になり、船底神殿はかり残ル

一手元酒杜氏茂エ門病死致し、跡酒杜氏武丸村忠助是迄手元に五年六尺致候ニ付杜氏ニ取立、酒造らせ候処無難に出来致

一稲元村伯父卯惣次手元世話焼ニ相招く、十月ハ入込む

一当年田久村入作田地お引戻作出百姓御仕居助合差出候、御称誉として御酒裂鰯頂戴被仰付、三郎丸久兵衛方名代差出

文政三辰年（一八二〇）

一大世間大概順の年なり

一夏蝗少々有り

一当年始て御郡方御備油有之、郡々村々之拝借被仰付、便利宜し、御国
中千五百丁、当郡中二百丁はかり御借渡ニ成ル

一作並仮成

一米直段二十二厘位

一大豆 二十目位

一大麦十五厘位

一四月十三日太惣祖母死去、行年八十才、興徳院崇誓貞仁大姉と号

一当春納戸藏立替、壁石垣一切入切六錢四貫目ほと掛ル

一御郡代小島源五左エ門様笹岡辰四郎様ニ成ル

一赤間大庄屋退役、徳重大庄屋へ成ル、宮司大庄屋退役、手光大庄屋ニ
成ル

一十二月廿五日夜、大島大火、一族沖吉屋隣まで焼失、同家にて止ル

一当年より村役人鉄砲獵御差留、鉄砲札御取上に成ル

一八月於会所御吸物御酒頂戴被仰付、先年出銀御称誉也

文政四巳年（一八二一）

一大世間大概順也

一田方根付砌旱、雨乞城山登有リ、村ニより植付干多し

一夏分蝗有リ、例之通御備油御渡ニ成ル

一心並よし

一米直段三十毫厘位

一大豆作秋迄ハ毛上至て宜し、中頃より不足、かり入模様にて大不作、

直段三十五厘位

一麦作仮成、直段十五厘位

一正月十八日太惣方御郡役所御呼出にて指方加役被仰付、脇差帶候様被
仰付、御郡方夫嘗人泊り郡賄被仰付、御紙役所方苦勞銀年々式枚宛御
渡被下

一当年下々御狀にて村々諸拝借御捨被下、御国中凡銀五千貫目余と申事

一御憐愍の御趣立感服仕、頭立候百姓方村々貧窮百姓江救米又ハ借錢捨
遣候者多し、手元現米二十俵救借財錢八貫七百目余、米十俵余遣ス、

右御称誉として太惣一代御參勤御往來箱崎松原出ニ被仰付

一当時郡御改正御時節にて村役人進退多し、公儀役人方御進退別而多し

一黒田惣右エ門様御奥様吉田六郎太夫様御息女御入、御祝儀として手元
方六錢五百目寸志致、御帷子御拝領

一黒田様御入財多、笹尾立山御払代錢五百目にて村方へ受持、黒木弘ニ
近村へ売

一当五月吉留村源十郎男子養子致、助三と改名須

一九月太惣夫婦小兒千代召連狗留孫山より防州山口大神宮參詣

一夏以来みち母病氣、九月留守中方節季押詰仕候迄大切に物入多し

一十二月 殿様齊清公御痘瘡、郡村役人献上御祝儀申上ル、尤村庄屋以
上也

文政五年年（一八二二）

一当年御免扱当村是迄之通被仰付

一春中大概順也、麦作不毛上実のりよし

一御家出財檜切差出候儀お称し被仰付、二月朔日御郡役所御呼出にて太
惣方相続候悴迄二代同様箱崎松原出ニ被仰付

一二月朔日御紙役所御呼出、紙方所江相談役被仰付、苦勞銀壹枚御増年
々三枚宛お渡被仰付、此節宮田町に宗像郡中御紙取立所御立ニ成ル

一大麦十八九厘位

一小麦廿四厘位

一夏分古米三十六七厘位

一五月八日〆植初、十五日迄にて根付済、六月中頃迄雨天勝にて田方出来かたし

一当春御作法替にて以前に被復、町浦御奉行御役号相止、御郡奉行惣号三奉行と唱、町郡浦御請持、町ハ御町方役、浦ハ御郡代御請持、郡切御支配被成候事

一御郡目付号相止、御陸目付〆郡目附兼役ニ相成ル

一長政公貳百年御忌御法事ニ付、黒田惣右エ門様京都紫野江御代参、六月二日御発駕、八月末ニ御帰国

一長政公御忌於崇福寺、八月四日御仏事ニ付京都孤蓬菴御下向御供養有之

一右同九月四日御城内東照宮御神祭ニ付郡町浦共ニ長政公御代〆御次第有之者又ハ当時お称被仰付置候孝心善行松原出之者並庄屋以上在役人中御館御白砂ニ而御能拝見御酒御赤飯御にしめ頂戴被仰付、尤当日雨天ニ付白砂ニ坪坂を敷其上ニ薙敷ニ相成ル、無礼之衆以下村々庄屋百姓迄一同御白砂也、諸士方以上御間内〆掛出ニ而拝見御上御出座也

一秋作常並大世間上作

一米直段三十目位

一大豆米同直段

一秋中天氣統ニ而刈上博取候ニ付上納方速ニテ十一月中ニ払切惣済ニ成ル、近年珍敷事也

一春内〆稲元刈三次ニ居家作遣ス、夏ニかけ成就致ス、入目一切手元〆

相仕廻遣ス

一御参勤御通方御手当筋ニ付大惣在勤中箱崎松原出方御免、赤間出方被仰付、当九月御参勤之節〆同所江出方

一中土蔵ニ而紛失米至而多し、惣村之御米百俵程行方不相分、其外ニも少し者紛失まゝ多し、此御仕組ハ御郡益之思召ニ有之由ニ候ハ共余り大造の事故混雜いたし、格別百姓益ハ見江不申段とり〆噂有之事

文政六末年（一八二三）

一松平豊後守様御叔父様嶋津桃次郎惣養子被為済、御名官兵衛様と奉申上 若殿様と奉申上

一寺浦新堤御築立、二月廿一日〆夫仕有之、三月七日ニ成就

一当春手元質場致立、御免札お渡ニ成ル

一田久村板井手御仕居、郡内ニハ稀成御普請ニ而殊之外大造なり、大工百五十工程掛り候由

一非常備難穀囲家別人数高ニ而囲俵ニ自分名札指、村方へ取集囲方致置年々詰替テハ其者分取替跡詰方致候御米

一村中開栗拾五俵買備致、手元蔵ニ開置

一産物御仕組初而相立

一お上思召ニ而百姓粮物為覚悟唐辛子作増作致、村々年々増作高書上致一米直段三十目位

一大麦十五厘位

一小麦廿目位

文政七甲年（一八二四）

一二月助三夫婦婚姻取合せ致ス

一麦作仮成

一 田方大世間不作

一 畠方仮成

一 米直段三拾壹目位

一 大麦十五厘位

一 小麦廿目位

文政八酉年（一八二五）

一 麦作仮成

一 田方不作

一 畠方不作

一 大世間田畠作

一 米直段三十六厘位

一 大麦十七厘位

一 小麦廿七厘位

文政九戌年（一八二六）

一 麦作 仮成

一 田方 仮成

一 畠方 仮成

一 近年物入多世帯向不操合、質場相止、家内儉約仕組相立ル

一 十一月保吉元服連八と改名致ス

文政十亥年（一八二七）

一 若殿様御初入奉祝、太三方正銀五百目寸志指上候ニ付御称誉被仰付、御慶事度々御吸物お酒頂戴被仰付候段御書附被下

一 殿様御下国、赤間宿流行病ニ付武丸御昼休ニ而赤間町裏御退道仕調問

違出来致、大庄屋禁足被仰付

一 御郡代組衆惣入替ニ而、怡土志摩掛方粕屋宗像掛リニ成ル

一 五月太三願之通所屋役加役共々ニ御免被仰付、家事一切助三方ニ相任セ隠居致ス

一 庄屋跡役助三ニ被仰付

一 六月朔日助三女子みき出生

一 御郡代小島源五右エ門様三奉行ニ御転役、跡御郡代大塚六内様ニ成ル

一 麦作 仮成

一 田作 仮成

一 米直段三十目位

一 大麦十七厘位

一 小麦廿目位

文政十一子年（一八二八）

一 二月末頃太三夫婦御国札順廻致ス、勝浦島屋庄七夫婦同行ニ而、豊前豊後肥後肥前長崎筑後諸所遊歴致ス、御国内式社十九所拝参、五月ニ

帰宅

一 当年野坂村太鼓田再興ニ付見物ニ参ル

一 八月九日夕希代之大風、当村転家居家三軒脇屋三軒、手元水車家転家致ス、近村ニ而ハ曲村名残村転家ニ而、怪我死之者有之、郡内所々死人之有、御国中ニ而ハ夥敷転家死人有之由、山野樹木転木中折数限り志れ須、凡山之様ニ成ル、手元柿木谷松木凡百五十本余も転木ニ成ル一同廿四日同様之大風ニ而人別家内ニ居者無之て岸などに穴を堀隠れ所など作り候者多有之大ニ騒動致ス、是等之事自然穴之上ニ立木等有之、下ハ甚無用心之事なり、転家も多新造之家多し、是ハ壁土之土附薄き故と聞ゆ、心得置へき事也

一 希代の大風故家居人命之取沙汰のみにて田方損毛に氣寄無之、日数を歴て御免返上之沙汰ニ成り、一切返免願出候村も有之候へ共投免ニ被仰付、程々御下免ニ相成ル、御国中にて拾万俵程御下免ニ相成候由、講座諸借財等指張一切相止候ニ付、上納類ハ兎や角相済候

一 御国中転家数

一同打たれ死之者

一 九月二日太三方養育方役被仰付、給米拾五俵村頭状御免諸見ケル兼帶苦勞郡々三十目御渡被下

一 風災ニ付御用銀被仰付、村々頭立候者寸志仕ル、手元助三正銀五十六貫六分寸志指上ル

一 麦作例年位

一 畠方実ぬけ多し

一 米直段 五十目位

一 大麦 廿五厘位

一 大豆 四十式厘位

文政十二年（一八二九）

一 黒田惣左エ門様々庄屋助三へ御羽織拝領被仰付

一 五月七日助三男子辰之助出生

一 麦作 仮成

一 田方 仮成

一 畠方 仮成

一 米直段三十五厘位

一 大麦廿五厘位

一 小麦三十目位

一 大豆四十六厘位

文政十三寅年（一八三〇）

一 去ル子年風災ニ付御用銀指上候段御称誉御書付お渡ニ成ル
一 御用銀被仰付、村々頭立候者寸志仕、助三へ正銀貳百五拾目寸志指上ル

一 当春嘉助家作致、伊六屋敷ニ居住致、弥吉分伊六分田畠山共ニ譲渡

一 近年釣筋水難打続、当年稲元水難ニ付助三へ米五俵救切遣ス

一 麦作 不宜

一 田方作並宜

一 畠方 仮成

一 米直段四十八厘位

一 大麦三十目

一 大豆 三十五厘位

一 十二月改元天保元年ト成ル

天保二卯年（一八三一）

一 四月去ル子秋風災ニ付居村へ米五俵救切ニ遣候ニ付、助三へ御称誉御酒鬯頂戴被仰付

一 同月右同稲元村へ米五俵救切遣御称誉、助三へ御吸物御酒頂戴被仰付

一 麦作例年位

一 田方 右同

一 畠方 右同

一 米直段三十八厘位

一 大麦廿八厘位

一 小麦三十六厘位

天保三辰年（一八三二）

一 去ル寅年御用銀指上候御称誉ニ而助三方一代箱崎松原出ニ被仰付

一 十一月運八夫婦婚姻取合せ済

一 麦作 常並

一田方 右同

一畠方 不作

一米直段三十八九厘位

一大麦小麦 去年位

一大豆四十目位

天保四巳年（一八三三）

一麦作 常並

一田方秋寒落早く晩田実入殊之外不宜、不作也、東国ハ大不作にて飢饉

ニ及、米穀直段壹石銀百五六拾目位ニ成候由

一畠方 常並

一米直段四拾八厘位

一大麦

一小麦

一大豆三十七厘位

天保五年年（一八三四）

一正月十五日助三男子友平出生

一四月太三野坂村入庄屋役被仰付、同月野坂村へ引越、御郡代役所より引

越料銀貳百目渡ニ成ル

一花房伝左エ門様白水養左エ門様御救奉行にて銀切手夥敷御仕立ニ相

成、御家中市中郡浦へ御貸渡ニ相成、融通あしく正金壹両ニ付銀札貳

百目位ニ成ル

一郡町浦之者へ永納銀と号出銀被仰付、銀札拾貫目指出す者へ壹人扶持

被下、松原ニ被仰付、四人扶持まで之者ハ庄屋格、拾人扶持より大庄

屋格、五拾人扶持大賀格被仰付、拾貫目より内貳百目以上指上候者割

合ニ而御米お渡脇指帶之儀御免ニ成ル、当郡中ニ而銀六百貫目余指上

ル、御國中ニ而夥敷事ニ付銀札直上り致し、金一兩ニ付百目九十目位

ニ成ル

一助三銀壹貫四百目上ル、運八銀三百目上ル

一夏分御救方仕組ニ而博多中島ニ而日本寄角力芝居あり、柳町遊女も御免ニ而高機敷にて見物致ス、前代未聞之事也、東之関稻妻西ノ関緋威と言角力取也

一秋ニ至同所ニ而江戸役者団十郎千両八百兩上方役者芝居あり、御構女中方御家老方之女中迄も御見物有リ

一冬ニ至銀札融通又々不宜、正金一兩銀札百七十目より貳百目ニ成ル

一御救方役所より町人百姓浦人直取合ニ而郡町浦御奉行御郡代にも引合無之、諸事取斗有之ニ付銀札ニ而田地受返之指纏等多、村々殊之外混雜いたし迷惑致ス者多し、助三手元ニも六拾俵余米程受返さ連無代錢同様ニ成候而甚難渋致ス

一去年秋東国不作ニ而飢饉ニ及候ニ付御国方より積登米三万俵大公儀より被

仰付候趣ニ而、村々江是迄用米被仰付置候分益後上納被仰付、古米直

段五十目余ニ成ル

一田方上作ニ付村々一統初穂米と唱寸志米上ル

一麦作近年之上作也

一畠方 仮成

一米 直段

一大豆

一大麦

一小麦

一野坂村吉田様上納例年三月払切ニ相成来候へ共年々莫大之滯出来致

候ニ付、太三入役初当年より脇村並冬払切ニ致十月切皆済取立致ス

天保六末年（一八三五）

一 春分博多中島ニ而去冬之通、上方役者芝居有り

一 夏分博多通り筋中島筋、上方同様夜店出ル

一 中島芝居所之跡富札所始る、町郡浦之者御家中も勝手ニ富札買候者多し、

鶏合せ牛馬売買免札など色々名目出来候而、風儀悪敷事共甚多し、富所之前一筋花咲候位之桜数株植立ニ相成、中島新地と号し、酒

肴茶屋等数軒建込、芸子茶屋女等大勢入込賑かなる事也

一 八月御郡代中三奉行中御免ニ相成、惣郡奉行国吉仁兵衛様川越又太郎

様木村市助様山田新三郎様御救方御兼帯ニ成ル、其後掛リ切御受持ニ成ル、両粕屋宗像ハ山田新三郎様ニ成ル

一 黒田惣左エ門様御家通り不残御焼失、村方よりも寸志銀等指上ル

一 鶏蹴合せ蹴合鳥飼候儀御制禁ニ成ル

一 十二月助三去秋作並宜敷、寸志米指上候段御称誉ニ而御酒鰯杯被仰付、村々老俵以上指上候者夫々御称誉御書付等被下

一 麦作かり腐多し

一 田方作並も不宜

一 畠方も不作

一 米直段

一 大豆

一 大麦

一 小麦

天保七申年（一八三六）

一 正月八日太三お呼出ニ而、去未十二月淡路様よりお渡之御書附を以野坂村上納相進ミ諸公役相励、百姓相懐申し候段御称誉ニ而、一代大庄

屋格ニ被仰付

一 吉田六郎太夫様方給羽織太三拝領被仰付

一 五月七日助三男子只次出生

一 八月黒田惣左エ門方助三方へ御掛物拝領被仰付

一 夏中雨天勝ニ而諸作物一切実入あしく、莖茎出来候而も花落候而実入無之、秋ニ至寒落早く田方熟口甚あしく、晩田ハ花咲出さず、出穂致候而もかぶかず青色にて熟せず、村別返免下見致候へ共、寒落障の穂

面不見馴事故、見掛ニ而合掛致候へハ格別大造之不足も不見ニ付返免相止候村も有之、又ハ御役所方内分指留ニ而相止候村も有之候へ共、

刈上致候所にて大ニ相違致、莫大之上納不足出来致、御国中一統毛上見損し居候事故、御上よりも追々余分ニ御下免御救被仰付候へ共、上

納不相償ニ付御地頭様方御救無利御貸渡等有之、兎や角払切り相済候へ共、粮物之者多貧窮、百姓冬内より葛根ところ木之根草之根等取

候而粮物喰足ニ致、希代之凶年と成ル

一 須恵村御下免

一 野坂村御下免

一 麦作かり腐多し

一 田方極々凶作

一 畠方 仮成

一 米直段七十目位

一 大豆四拾貳厘位

一 大麦五十目位

一 小麦六十目位

一 二月廿三日運八女子はつ出生

一 御救奉行花房伝左エ門様白水養エ門様御咎メニ而退役遠島ニ成ル

一 御郡奉行国吉仁兵衛様川越又太郎様御咎ニ而退役、御郡奉行平野茂平様山田新三郎様平野権九郎様木村市助様村上源左エ門様ニ成ル

一 去秋非常之凶作ニ而三十余ヶ国不作之由、上方直段日増引上、壹石ニ付銀二百五メ目ヲ三百目ニ成候由、当地ハ米壹俵金壹匁壹歩位ニ成ル村々切穀類他払指留、粮物喰続之覚悟申請候へ共、困窮之者多く、追々御上ヲ莫大之米錢御救拝借被仰候而も猶行届兼困窮之者多、山野之物專一二取候而、米糠粟ぬか又豆腐之花等ニ而餅ニ致し候位ニ付、御山内檜杉之上木御植立之内たりとも堀崩し候ニ付、急度御指留ハ無之候へとも、諸木損し不申様被仰付、御山方も村々江御救拝借等被仰付、御山奉行ハ松本平内様也

一 当年飢饉數十ヶ国ニ而、東海道筋ニ而ハ一日之往来筋ニ而餓死人七人も八人も見当候位有之、下中国筋ニ而ハ式人三人位も死人見当り候様有之候由、当国ニハ餓死ハ無之候へ共諸方より村次ニ而本国へ送返候病人殊之外多有之候

一 当年之飢饉ニ付村々頭立候者方救米或ハ安売米等救筋相立候ニ付、助三手元よりも米八俵錢貳百六十五厘救切ニ村方ニ遣し米九俵無利ニ而貸渡、手廻米之内廿俵村方へ安売ニ致し米壹升代錢百廿文ニ而売ル

一 先年買廻致置候粟十五俵村方方へ相渡す、但余り長年置候ニ付穀氣ぬけ候而不宜由也

一 野坂村ニ而太三方より米三俵同村へ救切ニ相渡ス

一 野坂村ニも仕組相立、米三百俵余雜穀五十俵余安売備相立、米壹俵代錢八十目之割ニ而小売致させ候、世並ハ壹俵代金壹匁壹分也

一 須恵村拝借米高

一同村拝借錢高

一 野坂村拝借米高

一 野坂村拝借錢高

一 麦作かり腐多し

一 田方上作、夏内方毛上宜敷ニ付盆前方米直段下落致し七月末頃ハ壹俵代錢六十目位ニ成ル

一 畠作仮成

一米直段

一大豆

一大麦

一小麦

一 当年十月十五日野坂村太三役場にて捨子有之、女子にて橋口天満宮氏子と書附を添たり、名をひさと附ル、入免貳吉方へ乳吞ニ遣し置

天保九成年（一八三八）

一 御順見使西国筋御下向ニ付、太三儀御案内庄屋ニ被仰付、名元書付、建部孫左エ門様大坂表迄御出迎ニ御指出ニ相成居候由ニ候へ共、御通駕之節足痛にて出勤不相成、振替ニ成ル

一 四月御順見使赤間宿御泊、曾我又左エ門様御茶屋御宿、大久保勘三郎様町茶屋御宿、近藤勘七郎様郡屋御宿

一 御順見使赤間宿御泊ニ而助三方出勤仕、受持筋出精仕候段御称譽御書附被下

一 七月廿八日助三男子五一出生

一 七月太三持病難氣再発ニ付願之通野坂村庄屋御免被仰付、同村跡庄屋藤助儀馴候迄相談役被仰付、養育方ハ是迄之通ニ被仰付

一 麦作当年もかり腐有

一 田方不作

一 畠方不作

一 米直段

一 大豆

一 大麦

一 小麦

天保十亥年（一八三九）

一 二月太三野坂村より引取新宅より移住居ス

一 去冬那珂三笠掛り数十ヶ村上納指支有之、大庄屋大勢退役被仰付、掛

り郡奉行平野茂平様も御退役、御隠居被成

一 去ル酉年拝借米銭不残捨切ニ而返納御用捨ニ成ル、同年上納致居候御

借米も御返し不被下段被仰付

一 四月助三方去々兩年助合米致候段御称誉、御料理頂戴被仰付

一 同時太三方野坂村ニ而救米遣候段御称誉、御酒鰯頂戴被仰付

一 十一月御国中一同御徳米大豆俵口ニ米三升宛増除上納被仰付、十一歳

以上人別米一升宛上納被仰付、大庄屋以上庄屋以上給米半分寸志上納

被仰付、太三方七俵半、助三方十俵半上納仕ル

一 大公儀より国々切手通用御指留ニ付御国切手御引上ニ付、村々頭立候者

へ寸志銀被仰付、助三方正銀百弍十目寸志上納仕ル

一 十一月十七日助三男子五一病死ス

一 麦作当年もかり腐多し

一 田方仮成

一 畠方

一 米直段

一 大豆

一 大麦

一 小麦

天保十一子年（一八四〇）

一 当春野坂村ニ而太三役場ニ仕居候古家当所ニ取寄せ、隠居家造致新宅より引移ル、古家道具持寄ル野坂より加勢夫ニ而持返候

一 六月九日夕大雨ニ而古今希大之大洪水、川々破損夥く山々就ぬけ、洗崩数限なし、当村ハ郡内ニ而別而破損無之と申程之ニ候へ共いげ谷堤

土手半崩、川筋一面洗崩し、蔵の前川土手土穴側切候ニ付須恵側引崩土手破損いたし村中にて洗崩打はぎハ田別ニ而損し畦数書上通り上納

御免被仰付、郡中ニ而八堤斗廿ヶ所余土手切有之、稲元、曲り、光

岡、久原、東郷、田熊、両西郷、久末川筋大造破損出来致、田地洗崩

洗込等別而多、郡中にて洗崩田方毛付障ニ相成候田数凡弍百町ニ相成

ル、嘉麻穂波鞍手内破損多、人家洗流数十軒有之、死人等も多有之候

由、御国中にて洪水ニ而怪我死之者四五十人も有之由、村所ニハ候而

ハ村絶ニ成候而、元ニ戻り候見込無地所多有之由也、稲元村前埃押に

て突埋候田地廿町余、当上納御用捨ニ成ル

一 洪水之夜大雨中ニ所々ニ火光見へ候由、諸人風説致ス

一 新宅住居替取繕長屋造作彼是大工三百工程掛ル

一 麦作所ニよりかり腐有之候へ共仮成

一 田方仮成、但洪水洗崩之分ハ当年より上納御用捨

一 畠方仮成

一 米直段

一大豆

一大豆

一小麦

天保十二丑年（一八四一）

一 去十二月大御前様御逝去ニ付正月十一日方御中陰之間鳴物停止被仰付、郡村ニ而も御扶持頂戴之者ハ日数七日、月代遠慮被仰付

一 二月助三別家致、新宅ニ引移ル、本家ハ運八相統致、酒造致ス

一 四月十六日助三女子志げる出生

一 八月御郡奉行掛り切受持相止、御郡代掛リニ成ル、粕屋宗像御郡代東郷三九郎様立花善兵衛様惣郡奉行平野与次右エ門様山田新三郎様御改名平三様木村市助様御三人ニ成ル、郡方御改正儉約之御達有之

一 当春方御家中借錢御仰付方御仕組ニ而松本平内様柳瀬貞作様塚田丈助様御仕組方受持ニ而御仰付之仕法相立、御家中方御返納米為替ニ相成、当郡中上納不殘御仕組方大坂登ニ被仰付、福岡、津屋崎、勝浦神湊、鐘崎五ヶ浦ニ御取立役人并中師迄御連越ニ相成、村々上納米俵拵別而念入、俵刎甚多く村々新手数ニ而手馴不申儀ニ付迷惑致ス、然し追手手馴候へハ直登せハ郡益ニも可相成様見へ申候

一 十二月十五日運八女子多み出生

一 麦作

一 田方

一 畠方

一 米直段

一 大豆

一 大麦

一小麦

一 御山奉行山本嘉三様ニ成ル

天保十三寅年（一八四三）

一 当春御家中借財仰付方相止、御勘定所引付ニ相成、御家中町浦へ石札お渡被成、銀主之者甚迷惑致ス、融通不宜、御定米一升錢六十文之分現仕方ハ廿文位ニ成ル

一 七月正臘玉子為替切手大坂問屋野田屋福右エ門手形金切手御引上、博多芦屋会所御取止ニ相成、村々ニ入込居候金切手御郡役所へ相納候様被仰付、運八手元方壹貫目余も指出居申、引替之儀ハ如何様共不被仰付

一 御仕組方御役人方御咎ニ而偏塞被仰付平内様ハ御中老預ケ人ニ相成ル一是迄融通之銀二朱銀一朱不殘引替候儀被仰付、村々有合候分不殘御郡役所へ指出ス、十四五年以前方正銀正錢仕無之惣而金仕ニ相成、諸品万物牛馬代ニ至迄金極ニ成候位ニ而、御引上後正錢無之、日用甚不便利成ル

一 大公儀御囲米ハ前々方御備ニ相成居候へ共、此節当年方三ヶ年ニ村々用方被仰付、御藏上納米囲半分、村方百姓囲半分、都合当村米高三十六俵四ヶ年ニ相備候様被仰付、当年方囲方致ス

一 四月十九日太三方紙方頭取役加役被仰付、給銀御紙方銀七枚被下

一 七月太三方野坂村庄屋後見役退役願出、願候通御免被仰付

一 麦作近年方ハかり腐少し

一 田方作並宜し

一 畠方仮成

一 米直段

一大豆

一大麦

一小麦

天保十四卯年（一八四三）

一 麦作かり腐有

一 田方仮成

一 畠方仮成

一 御郡奉行平野与次右エ門様御退役御隠居山田平兵衛様御退役御減知松

本平内様減知押隠居柳瀬貞作様退役隠居塚田丈助殿退役平濠組ニ成ル

一 河村五太夫御隠居松山様御政事御相談御出仕日勤ニ成ル

一 梶原平十郎様御元々御受持御知行御自分納ニ成ル

一 御郡奉行村上弥左エ門様梶原源三郎小西正左エ門様

一 御郡代小藤五助様伊丹又兵衛様

一 四月十七日太三方朝町村庄屋和三郎後見役被仰付、郡切立方米五俵宛

年々被下

一 八月朔日助三女子みき徳重村叔父竜口源次郎倅作次郎ニ縁付致ス

一米直段四十壺式厘位

一大豆四十四五厘位

一大麦三十四五厘位

一小麦

天保十五辰年（一八四四）

一 麦作上作

一 田方仮成

一 畠方仮成

一 三四月頃旗雲出ル、夕方五夕時漏までニ而消ル、長き事西方東ニわたりて中天に至ル、巾二尺斗リと見ゆ、色黒し、日数三十日斗りも過て見ゆることなし

一 年中大体無事、近年諸御用手数至而少く、御郡奉行御郡代御出郡も数無之、郡村役人も事少し

一 長崎表ニ阿蘭陀本国船之大船一艘渡来致、六月末方御家中市浦々大騒動にて殿様も度々長崎へ御越座被遊、村々へも大非常ニ至候へハ長崎へ直通之人馬牛当被仰付、村々ニ而割当前之人馬籤取に而長崎行之人物相極手当致居候へ共、郡人馬出方ニ不及、十一月初出帆致候由、船長サ三十六間とか申事也、船中之人数三百余人乗込居候由噂也

一 十二月改元弘化元年ト成ル

一米直段

一大豆

一大麦

一小麦

弘化二巳年（一八四五）

一 麦作不作、冬之内暖氣ニ而、正月頃早蒔麦など地元により候て出穂いたし候も有之

一 田方夏内天氣順能く毛上出来込ハ上々作ニ候へ共、秋寒落早く熟口殊の外後連候故か実入わろし、但村所ニ寄候事ニ而中の上作位にて有之候、当村ハ他村方余程劣候由

一 畠方極々大不作、秋大豆皆無と申程ニ而、種大豆も無之所多し、少し実入有之も上納ニ指向く大豆聊も無之ニ付宗像裏粕屋秋大豆上納分御驗知不殘代米上納相願代銀とハス合立候ニ付御地頭御不承知之向多甚

混雜ニ及、然し御郡代方お伺ニ相成、御裏判方御引合有之、取前方代銀代米上納ハ御作法も有之儀ニ付御家中も乍迷惑御承知ニ相成、当大豆ハ不殘代米ニ而上納相濟

一御郡代伊丹又兵衛様長岡七左エ門様

一当春山田増福院本堂再建棟上濟、三月廿三日入仏供養濟、住持病氣にて惣世話行届兼世話方被相頼、卯ノ冬方太三相加リ世話致ス、世話人ハ山田村庄屋組頭中其外両三人引切世話致ス

一当秋も異船長崎表へ着津致し、御家中方出張ニ付、浦水夫出方又々騒動致ス、此船ハ全く海賊類と聞候、食物乞ニ来着せしものと見ゆ、牛并米など被下候而直ニ出船いたし候由也

一年中大体無事庄屋元跡御用も事少し

一十一月廿六日助三男子荒次郎出生

一十二月六日徳重作次郎男子岩平出生

一当年世間不作と申ニ而も無之候へ共、秋方米直段高直ニ而、冬内高下区々ニ而居り候所、当地四十五六厘位、福岡四十八九厘位

一上座夏大豆福岡ニ而六十目余、亳州大豆ハ五十目位、但島大豆ハ下品ニ而見付も悪敷上納不相成、醬油屋不相好由

一大麦

一小麦

弘化三年年（一八四六）

一只次五月野添宇三郎方江養子ニ遣ス、所用ニ而日記不致

弘化四年年（一八四七）

一八月廿六日太三お役所御呼出之上田島触大庄屋役被仰付、田島宮上殿ニ役場建ル

一六月十日運八女子喜代誕生致

嘉永元年申年（一八四八）

一運八正月頃方頼付、二月十八日死去致

一助三新宅方本家ニ出ル、十一月廿八日安郎儀酒造致候也、一族中係錢百二十兩開請出来候

一土穴庄屋宇左エ門死去致、助三四月四日御役所御呼出ニ而土穴村掛持被仰付

嘉永二酉年（一八四九）

一安郎儀六月八日博多新屋養子ニ遣ス

嘉永三戌年（一八五〇）

一六月郡内大洪水破損多

一土穴村返免御願申上候、御郡奉行一通リ御見分ニ而投免ニ御用捨被仰付、貳百三拾俵余統而村々御用捨有之、須恵廿六俵余洪水畦荒御用捨有之、三拾七俵余手元田地余米六俵ニ下リ多

一六月二日博多新屋娘病死

一六月朔日之大雨ニ而鞍手清水観音山就崩家五六軒、打崩、死人十三人
 忝人死骸不知

嘉永四亥年（一八五一）

一五月廿七日方田植初

一作並相応ニ有之、大豆作不作、米方七厘高直ニ有之

一米四拾目位

一大ツ四拾七厘位

一太三去冬方於田島村腫物致、高野武谷底立尾仲津田郷山と薬用外療致、五月廿日手元ニ引取り廿五日死去、大庄屋跡役武丸村善兵衛被

仰付、勝浦村ニ入役、太三行年六十歳

一助三俣只次野添宇三方養子ニ參不縁ニ而引取、七月十四日惡症ニ而死
去

一七月廿三日伊三太倅虎吉出生

一十一月九日運八女子は津、三兵衛取合を致本家ニ而酒造致、助三夫婦
子供連れ隠居ニ転、媒人石松林平

一大殿様二月廿七日未上刻御逝去被為遊

一少将様御前様六月十八日御逝去被為遊候

嘉永五年（一八五二）

一潤二月有り、五月中四月春の日照勝ニ有之、植付雨無ク、当村井手掛

リニ而水取相済、五月八日田植初、十二日堅作ニ成、隣村水取出来
不致処、五月七日潤雨有之、一統徳重触村々水取相済、八並触勝浦触

村々之内水取不相済田地多ク、別而八並触多、六拾町余苗差不出来、

蒔物畦ニ相成、田植頃方鋤山西風吹、五月十七日白雨有之、徳重触村

々相応潤候広ク降不申、夫方一向降雨無之、旱魃ニ而相成所多ク、雨

乞日々不絶、郡中ニ而鐘岬鐘引、裏粕屋久保村千鳥池干有之、裏粕屋

郡中出夫、宗像方も千五百人加勢致、六月八日方北風ニ替リ九日大白

雨致一統潤、六月廿日大風ニ而廿一日朝方雨降風も止ミ畠方風障程

之事無之

一八月両度大洪水ニ而釣川筋水漬田ニ相成田方出来込宜敷候処、寒落水

障ニ而當触稻元田久曲朝町野坂返上致、村々ニ而早田之内蒔畦等致候

ニ付返上之処如何御伺申上、蒔畦数等調子候上春免ニ致、殊畦返上ニ

相成村々御下免六俵ニ少候上、蒔畦過米上納被仰付、村役人中師走廿

日過ニ蒔畦之不念ニ付禁足被仰付、十二月廿八日御役所お呼出之上御

免被仰付、裏粕屋古賀村庄屋新原村大庄屋返上ニ付放役被仰付

一蒔畦過料上納ハ一竿之内春蒔之蒔畦有之而も一竿掛り上納被仰付候ニ
付野添村杯ハ七拾俵余も過米上納致、返免村いつ連も難渋致、御奉行

秋塚次市兵衛様

一徳重村大庄屋石松伴蔵三月退役願之通被仰付、数年相勤候段御称誉ニ
而生涯米五俵被下、宗像大庄屋相談役被仰付、跡役息林平ニ被仰付

一三月久末村大庄屋城戸小三郎死去ニ付林平入役被仰付、八並触ニ成、
徳重跡役息三郎平ニ被仰付、兩人共ニ助三從弟也

一三月山田村増福院三百年忌開帳有之、三日十五日二七日見物等有之

一五月八日久太郎出生

一作次郎不縁ニ而新屋方引取

一当春初村山田觀音山大造ニ引割、人家寺等廢家ニ致、里ニ転、此先如
何可相成

一米五拾式厘位

一大豆同直

一徳重触村々年来御納方相進ミ諸大役出方早ク風俗宜段御称誉、大庄屋

庄屋組頭中御酒鯉頂戴被仰付、百姓中踊一座見物被仰付

一小兒為御救御上各種痘之儀被仰付、村中小兒九月植痘瘡致、うてニ六
ツ植、手元やす、久太郎植、此先流行痘のか連候義如何

嘉永六丑年（一八五三）

一春分順ニ有之、麦作出来宜、四月頃日照ニ而取実不宜

一田植前日照ニ而水取、当村井手掛リ水取済、隣村水取無之、五月十八

日大雨一統水取ニ相成、当村十八日田植初、廿二日頃惣堅作ニ相成、

夫方一向雨無之、六月十二日夕立致、堤水六月中旬迄有之、四月末方

田方白旱ニ相成大旱魃、所々雨乞、御上方も五社御祈禱、触村ニ而も

社人山伏僧湯立火立登竜様々御祈禱有之、沖津宮にも御奉行方御祈

願ニ而、御役所^も御渡海ニ相成、助三にも御籤当リニ而六月廿九日
 大島渡海致、二夜三日御祈禱有之候え共一向降雨無之

七月末頃遠賀別府触^る雷山大悲王院律師大徳之法印ニ付御願申、吉木
 村江請願致、八月三日満願之日^る降雨有之、当村土穴山田三ヶ村とも
 右御祈願ニ加る、夫^る水取統候得とも三十日之白干ニ而村上^ミ等焦上
 リ大痛、前田当リハ出穂延引致希代之旱魃ニ有之、山付村々ハ出水、
 野坂光岡上^ミ寄村々ハ夕立兩三度有之、日焼少ク陵嚴寺三分作、土
 穴、すへ、田久、稻元、堤取切之後一向出水も無之大痛^ミ相成

一公方様七月廿二日御蒙御被^為遊候段到来有之赴ニ而、八月四日^る九月
 十二日御中陰中音楽御停止被仰付、其外店卸杯之稠数御停止被仰付

一七月異船長崎来着致、御城下御役々様御出張、侍従様御越座被^為遊、
 浦々水夫凡三千人出方引舟等も浦々割付ニ而長崎詰

一慶賛障名ニ付助三藏太と改名致

一若殿様伊勢津藤堂様^る御養子、五月四日御初入被^為遊、御付添御家老
 野村隼人様若殿様侍従様と奉唱

一去ル戊年損毛ニ付貧民粮物救致候段御称誉被仰付、正月御酒鯛助三ニ
 頂戴被仰付

一千島池ニ而雨乞修驗中祈願ニ而法華經一字一石之御祈禱有之居候処、
 八月朔日福岡浦山伏金剛院溺死致

一陵嚴寺、田久、曲、稻元、須恵、土穴返免致

一米式百五十俵余

一同百八拾俵余

一九月廿六日藏太茂一郎伊藏於田島村御免用係^る御達、藏太野坂村江入
 役被仰付、茂一郎土穴村江入役被仰付、須恵庄屋伊藏ニ被仰付

一須恵土穴返免御検見、十月廿三日御郡奉行御重用御出郡、須恵土穴御
 検見被仰付、藏太両村御見分御案内被仰付、御免用之畠等両村共ニ御
 案内申致

嘉永七甲寅年（一八五四）

一藏太正月八日御役所御呼出之上数年来相勤候段御称誉仰付、大庄屋格
 ニ被仰付、別紙御書付頂戴被仰付

一三月廿五日

於御殿御能拝見被仰付、廿三日^る出福仕候処、長崎異舟来着致候趣注
 進有之、御能相止メ御酒赤飯にしめ等御渡ニ相成引取四月五日又々御
 能拝見被仰付候御達有之、藏太出方不仕、御能拝見ハ大庄屋庄屋等御
 次第有之者松原出之者、伊藏三月越ニて出寸者也

一春^る時化勝ニ有之、六月七日其後廿九日洪水川土手破損多ク須恵川土
 手四ヶ所破損致、触夫凡七百人出夫、後田畠共ニ相応作並ニ有之

一七月八日夕伊藏伴虎吉病死致、行年四歳

一野坂役場三月頃^る建方大工入込、古家石丸^る、永代錢壹貫八拾五厘、
 大工木挽凡三百人掛リ、建次二階等ニ致候へハ語々手入一切錢高凡五
 拾兩余ニ相成、四月廿三日家内共ニ入込

一四月廿八日代四郎畦町栄松屋ニ養子ニ参ル

一水鏡権現様御年祭ニ付四月九日於

御殿御料理頂戴被仰付、藏太八日^る出方大庄屋、大庄屋格御次第有之
 者斗

（終）

附記。

この文書の判読については福岡学芸大学小倉分校の飯田久雄助教授
 の指教を辱うするところ少くなかった。謹んで謝意を表記する次第
 である。